



大阪大学大学院人間科学研究科

附属

未来共創センター

年次報告書 2021

Annual Report 2021

未来共創センターとは？

人間科学部は、人間についての理解を深め、人間とは何かという根本的課題と人間が営む現代社会の多様な課題を総合的・学際的に探究し、時代の要請に応えることのできる新しい学問分野の創造を目指して、昭和47年（1972年）に、「人間科学」の名称を掲げる日本での最初の学部として創設されました。人間科学部・研究科の掲げる「現場に寄り添い、課題を探り、その課題解決に向けた学際的な視点からの研究活動の成果」を学内外に発信しながら、人間科学研究科と外部の結節点となることを目指した附属未来共創センターが2016年4月にスタートしました。研究科内の教員、学生の多様な出会いと連携を生み出し、新たな学問領域の開拓を支援することも、当センターの目的です。そして、これらの活動を通して、学部学生・大学院生に向けて多様な学びの場を提供することも目指しています。さらに、2017年度からはOOS（大阪大学オムニサイト）協定を軸とする社会学連携活動も開始し、2021年度までに22の協定が生まれました。これまでのセンターの活動が、「研究成果の社会発信」を主に目指すものとするなら、OOSによる連携・協働活動は、「社会の諸アクターとの協働を通じた共創知の創出」を試みるものです。OOSが創出する様々な「場」で人々が出会い、共感し、共生の輪が広がることを目指しています。

多様な活動を通して 社会への貢献をめざします

オリジナリティあふれる多様な活動を発信し社会貢献をめざしています。

◇人間科学セミナー／出張授業

大学内で、または大学の外で、人間科学の教員が研究成果を発信するセミナーや講義をしています。

◇まなびのカフェ

参加者とともに語りあう、交流型の学びの場です。教員が外に行くだけでなく、外部のパートナーが大学に来て共にまなぶ場を、気軽なカフェとして実施します。

◇「シリーズ人間科学」の発刊

研究内容を一般にも分かりやすく発信する本として、人科の教員がテーマに合わせて共同で執筆しています。これまでに「食べる」「助ける」「感じる」「学ぶ・教える」「病む」「越える・超える」「争う」の7冊が発刊されています。

◇ジャーナル『未来共創』の発刊

最新の研究や活動報告をまとめたオンラインジャーナルを、年1回発刊します。

◇研究会の運営

大学外からも参加可能な「共創知研究会」を主催しています。また、テーマを定めた研究会も実施しており、2020年度は「レジリエンス」、2021年度は「教育と格差」をテーマに多分野の教員・学生が議論を重ねました。この研究会の成果は特集論文として、ジャーナル『未来共創』を通じて発信していきます。

大学らしい「共創の場」から 共創知をうみだします

大学における学びや研究を充実させ、多様なアクターとともに新しい「知」をうみだします。

◇OOS協定

産官社会学連携により、人間科学の教員とパートナーとともに、学内外のセミナーやイベントの「場」、企業・財団・社団・地方自治体・NPO/NGOなどの活動の「場」を支援・活用し、共創知をうみだします。

◇オープン・プロジェクト

学系間および他部局との協働を推進し、本研究化と社会の結節点としての社会学共創活動を展開することにより、共生社会実現に向けての実践的な教育活動を図るために設置されました。現在、12プロジェクトが展開され、さまざまな社会との結び目をつくり、あたらしい場をつくっています。

◇学生プロジェクト、ブックトーク

学生の自由で、独創的な発想に基づく学際性のある社会との共創的なイベント、活動を支援しています。学系を超えた交流会の開催など、学生ならではのプロジェクトが展開されています。

目 次

はじめに	1
I 未来共創センターの概要	
1 設立の経緯と背景	2
2 活動目的と概要	3
3 運営体制	3
II 活動報告	
1 センター主催のイベント	
1.1 人間科学セミナー	4
1.2 まなびのカフェ	10
1.3 学生企画によるプロジェクト	11
2 OOS	
2.1 OOS 協定	15
2.2 OOS 関連イベント	26
2.3 OOS シンポジウム	26
3 オープン・プロジェクト	
3.1 オープンプロジェクトの活動	29
4 研究事業	
4.1 研究会の運営	41
4.2 ジャーナル『未来共創』の発刊	43
5 教育事業	
5.1 未来共創センター担当授業	44
5.2 高校への出前授業	44
5.3 シリーズ人間科学の発刊	45
5.4 『私の一冊』の発刊	46
6 その他の活動	47
III 未来共創センターの活動に関わった皆さんの声	
学生の感想	48
学外の方	49

はじめに

2021 年度の未来共創センターの活動についてご報告申し上げます。

2021 年度もやはり新型コロナウイルス感染症流行の影響を強く受け、対面でのイベントが制限された 1 年間でしたが、共創センターも社会全体も次第にこの状況に慣れ、それなりに活動を継続できた 1 年であったと関係者一同自負しております。組織改革については、年度末にセンター運営委員会のスリム化を諮り、従来人間科学研究科各学系 2 名の運営委員であったところを 1 名ずつとしました。運営委員会はセンターの最終的な意志決定機関ですが、スリム化することで議論をより実質的で機動的なものにします。

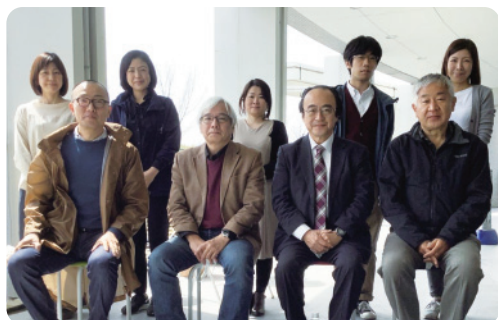
現在ではセンターの中心的活動の一つとなっているオープン・プロジェクトも、継続 10 件に加えて新たに 2 件新設され、全学レベルでの活動も展開されています。社会とのきずなを強化するもう一つの活動である OOS 協定については、新たに 3 件を締結し、感染対策を行いながら対面での調印式を実施できました。累積している協定先との連絡も定期的の実施し、関係強化に努めています。また、これまでセンターとしては目立っていなかった学生との共同作業も、今回あらたに「学生プロジェクト」という企画のもとに始動しました。大学における「共創」はエンドユーザーである学生との共同作業なしにはありえないと考えます。これらの活動により 2021 年度は 45 件の会議・シンポジウム等を実施し、学系、大学、社会、学生とのつながりはいっそう広範囲で強いものとなっていると考えます。

年度後半より、2022 年度の人間科学部・人間科学研究科創立 50 周年記念事業に向けての準備を進めています。センターでは OOS 協定、オープン・プロジェクトの各事業を中心に、同窓会と連携しながら記念事業の実施に向けて奮闘しているところです。ここでも在学生からのアイデアを募集するなど、学生の参画を促していきます。

年度末から突如として発生した欧州における戦争が暗い影を落とし、コロナについても再び先が見えなくなりつつある状況ですが、こうした状況のときこそ「共創」という言葉は生きなければならないと感じるこの頃です。4 月より、センター長を村上靖彦先生に引き継いでいただき、共創センターがこの時代の中で少しでも光を掲げ続けることができるように祈念いたします。

2022 年 3 月 31 日

未来共創センター長 山中 浩司



1 未来共創センター設立の経緯と背景

人間科学部は、人間についての理解を深め、人間とは何かという根本的課題と人間が営む現代社会の多様な課題を総合的・学際的に探究し、時代の要請に応えることのできる新しい学問分野の創造を目指して、昭和47年（1972年）に、「人間科学」の名称を掲げる日本での最初の学部として創設されました。4年後には大学院も設置され、当初から設置されている人間科学専攻（4学系：行動学系、社会学系、人間学系、教育学系）と2007年に大阪大学と大阪外国語大学の統合によって設置されたグローバル人間学専攻（1学系：グローバル人間学系）の2専攻5学系体制で、教育研究を展開してきました。

しかしながら、現代社会の急激な構造変動とそれに伴う人間生活の本質的な変化の中で、人間科学部・研究科が創設以来、最重要視してきた「自らの専門領域を深化させながら、俯瞰的な視点を持って、異なる学問領域との多様な連携と融合を実践する学際的な教育・研究活動」をさらに推し進めなければならないと認識するに至りました。そのために、新しい枠組みが必要であると、私たちは結論しました。

そこで、本研究科では従来の2専攻5学系体制から、1専攻4学系体制に改編することを決定しました。具体的には、人間科学専攻（行動学系、社会学系、人間学系、教育学系の4学系）とグローバル人間学専攻（グローバル人間学系の1学系）の2専攻を、人間科学専攻（行動学系、社会学・人間学系、教育学系、共生学系）の1専攻にしました。

新組織としての人間科学専攻には、新しい学問領域としての「共生学」の開拓を目指して、従来の5学系の教員が参集して「共生学系」を創設します。今日の多様化する社会においては、紛争、大規模災害、環境汚染、貧困、高齢化、格差などあらゆる問題が生じ、人々の間に、あるいは社会に様々なレベルでの軋轢を生みだしています。それゆえに、「人種、民族、言語、宗教、国籍、地域、ジェンダー、セクシュアリティ、世代、病気・障がいなどの違いを有する人々が、その違いを認めながら、共に生きること」である「共生」を学際的に研究する「共生学」の構築を、本研究科は目指すことになりました。

本研究科は、従来から、国内外の大学や研究機関との国際共同研究や、学内の他部局との共同研究を積極的に展開し、「現場に寄り添いながら、文理融合的で学際的な研究活動」を展開してきました。この機能を一層強化するため、今回の新体制への移行に際して、本研究科と大阪大学他部局、国内外の大学・研究機関、NPO・NGO等多様な団体、さらには市民社会をつなぐ「結節点」として、本研究科内に「未来共創センター」を新たに設置しました。



大阪大学大学院人間科学研究科

附属 未来共創センター

2 活動目的と概要

本センターは、本研究科教員の個別の学問領域における研究の機能強化だけでなく、異なる研究領域の研究者との接触や協働を通して、新たな融合的学問領域の展開と、国内外の現場に寄り添った実践的な教育研究活動の実現を目指します。

学部学生や大学院生は、本センターが企画・運営する公開講座、セミナーやまなびのカフェ、さらに学術図書の企画・出版等の事業に参加することで、研究成果の一般社会への還元方法やコミュニケーション力・対話力の向上、及びプロジェクトの企画・運営能力などの実践的能力を身に着けることが期待できます。さらに、2017年度からはOOS（大阪大学オムニサイト）協定を軸とする社会学連携活動も開始し、「社会の諸アクターとの協働を通じた共創知の創出」を目指しています。

3 運営体制（2021年度）

《未来共創センター構成員》

未来共創センター

山 中 浩 司 教授 [センター長] (兼)	稲 場 圭 信 教授 (兼)
渥 美 公 秀 教授 [副センター長] (兼)	河 森 正 人 教授 (兼)
澤 村 信 英 教授 [副センター長] (兼)	栗 本 英 世 教授 (兼)
岡 田 千あき 准教授 (兼)	白 川 千 尋 教授 (兼)
中 野 良 彦 准教授 (兼)	高 田 一 宏 教授 (兼)
木 村 友 美 講師	岡 部 美 香 教授 (兼)
石 塚 裕 子 講師	森 田 敦 郎 教授 (兼)
川 渚 千恵子 特任事務職員	石 蔵 文 信 招へい教員
織 田 和 明 特任研究員	

未来共生イノベーター博士課程プログラム部門

榎 井 緑 特任教授	平 尾 一 朗 特任助教
MELLUER Stephen 特任講師 (常勤)	佐々木 美 和 特任助教
徳 永 恵美香 特任講師 (常勤)	鈴 木 ひでみ 特任事務職員
王 一 瓊 特任助教 (常勤)	亀 岡 美 穂 特任事務職員

2021 年度 未来共創センター活動の概要

未来共創センターでは、様々な「社会とつながる」交流の場づくりを行ってきました。1. センター主催のイベント、2. OOS 協定や関連イベント、3. オープン・プロジェクト、4. 研究事業（ジャーナル発行）、5. 教育事業、その他にもスタディツアーなど、多様でユニークな取り組みが実施されました。2021 年度は、引き続き新型コロナウイルス感染症の影響が残るなかで、工夫を凝らしながらイベントが開催されました。下記は、2021 年度に実施した活動の一覧です。

1 センター主催のイベント

◆1. 1 人間科学セミナー

大阪大学人間科学研究科の教員らによるセミナーで、一般にも広く公開しています。今年度は、第 47 回から第 52 回までの 6 回のセミナーが開催されました。

日付	時間	タイトル	氏名	場所
2021 年 12 月 2 日	17:00－ 18:30	第47回 The evolutionary replacement of matriarchies: The history of gendered social structures based on kinship, linguistics, religion, and DNA	Etzrods Christin	ラーニング コモンズ +Zoom
2021 年 12 月 9 日	17:00－ 18:30	第48回 外国人に対する排外主義と差別	五十嵐 彰	ラーニング コモンズ +Zoom
2022 年 2 月 28 日	14:30－ 16:30	第49回 ジェンダー研究の 40 年－ 教育・研究・裁判	牟田 和恵	第 51 講義室 +Zoom
2022 年 3 月 5 日	15:00－ 16:30	第50回 生と死と、命と －心理老年学と臨床死生学－	佐藤 眞一	大阪大学会館 +Zoom
2022 年 3 月 15 日	15:00－ 16:30	第51回 安全ヒトすじ 45 年 ～人間は変わる、 人間は変わらない～	臼井伸之介	第 51 講義室 +Zoom
2021 年 3 月 25 日	14:00－ 16:30	第52回 雨、暴力、権力 首長制と階梯式年齢体系を めぐる長い拡大事例研究	栗本 永世	第 51 講義室 +Zoom



2021年12月2日

Additionally, I intend to measure the power of the genders in the household/economic activities, in the community/political activities, and in religion/spiritual activities. This should allow me to test several hypotheses about matriarchies and patriarchies. The most important hypothesis is that matriarchies existed, in which women had more power than men.



Etzrods Christin 准教授

未来共生学講座

2021年12月9日

2019年東北大学大学院文学研究科行動科学専攻博士後期課程修了。博士（2019年 東北大学）。研究テーマは社会意識、多文化主義、移民、集団間関係。



五十嵐 彰 講師

社会環境学講座

ジェンダー研究の40年 — 教育・研究・裁判

2022年2月28日

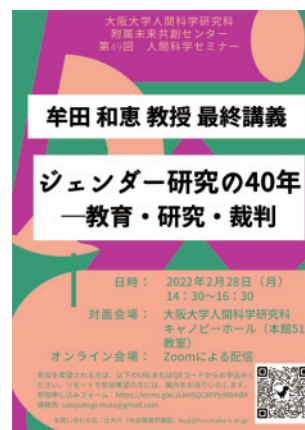
【最終講義】

牟田和恵教授は、ジェンダー論・家族社会学分野の第一人者として長年にわたり研究教育に携わってこられた。家族・ジェンダー問題への深いコミットメントは、初期に取り組まれていた社会運動論と接合され、現代社会における女性運動やセクシャル・ハラスメント等の研究および実践活動に展開されていった。最終講義では、その経緯をふり返りながら現在の問題状況と課題を分析・解説され、聴講者との活発な質疑応答がくり広げられた。

【略歴】

1987年京都大学大学院文学研究科社会学専攻博士後期課程退学。2003年に大阪大学大学院人間科学研究科助教授に着任、2004年から同教授。2007年に大阪大学大学院人間科学研究科博士号を取得。大阪大学男女共同参画・社会学連携室員（2015-2016年）、大阪大学副理事（2015-2016年）などを歴任。

初期の代表作『戦略としての家族—近代日本の国民国家形成と女性』（新曜社、1996）は、今でも家族社会学分野で参照されることが多く、『実践するフェミニズム』（岩波書店、2001）、『ジェンダー家族を超えて』（新曜社、2006）等の専門書の他、『部長、その恋愛は、セクハラです！』（集英社、2013）のような啓発書など、多数の研究成果を公刊されている。



講演者

牟田 和恵 教授

社会環境学講座

生と死と、命と
ー心理老年学と臨床死生学ー

2022 年 3 月 5 日



【最終講義】

佐藤眞一先生は、高齢期の生きがいや幸福感、主観年齢、家族関係の変化、孤独や孤高、知恵、認知機能評価、介護職員の学習やメンタルヘルスなど、高

齢者に関わる様々なテーマに取り組んでこられました。特に近年は、施設介護でのパーソナルケア分析法と日常会話式認知機能評価（CANDy）の開発に力を注がれました。社会還元活動にも積極的に取り組まれ、認知症の心理を分かりやすくまとめた『認知症の人の心の中はどうなっているのか？』（佐藤眞一、2018、光文社新書）や『マンガ認知症』（ニコ・ニコルソン、佐藤眞一、ちくま書房、2020）などの著書を出版された他、日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団や大阪府社会福祉事業団などをはじめ、様々な学外団体に携わり、介護やケアに関わる啓発活動に尽力されました。

【略歴】

1987 年に早稲田大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程単位修得退学後、東京都老人総合研究所に研究員として勤めた。1997 年に明治学院大学文学部心理学科助教授、2004 年から同教授。1999 年、埼玉医科大学にて博士号を取得。2002 年から 2003 年にドイツの Max Planck Institute for Demographic Research に上級客員研究員として所属した。2009 年に大阪大学大学院人間科学研究科に教授として着任した。



大阪大学大学院人間科学研究科
臨床死生学・老年行動学研究分野
附属未来共創センター 第50回 人間科学セミナー

佐藤眞一 教授 最終講義

生と死と、命と
ー心理老年学と臨床死生学ー

2022 年 3 月 5 日 (土)
15:00~16:30

対面会場：大阪大学会館 1 階
アセンブリー・ホール
オンライン会場：ZOOM

申し込み方法：
参加をご希望の方は、以下のURLまたはQRコードからお申し込みください。案内をお送りいたします。
<https://forms.gle/N2Gv9bdtHjpcnHtLK0G>
お問い合わせ先：春日彩花 (a-kasuga@hus.osaka-u.ac.jp)



講演者

佐藤 眞一 教授

臨床死生学・
老年行動学研究分野

安全ヒトすじ 45 年 ～人間は変わる、人間は変わらない～

2022 年 3 月 15 日



【最終講義】

臼井伸之介先生は、日常生活や産業場面におけるヒューマンエラーの発生メカニズム、および事故発生の背景にあるヒューマンファクターを心理学の観点

から解明し、得られた結果を広く社会に還元することにより、ヒューマンエラーや事故の防止に資する研究を行ってこられました。

最終講義では、ご自身が開発されたエラー体験プログラムソフトや不安全行動誘発・体験システム、現場作業員を対象にした効果的な安全教育の実践事例をご紹介された他、幼少期からご退職までの半生を振り返り、ご家族や関わりのあった全ての方への感謝を述べられていたのが印象的でした。

【略歴】

4 期生として、大阪大学人間科学部を卒業。同大学院人間科学研究科博士後期課程単位修得退学後、1987 年 4 月より大阪大学人間科学部助手。1990 年からは労働省の産業安全研究所の研究員を務め、その間 1995 年に博士（人間科学）。1997 年に大阪大学人間科学部へ助教授として戻られ、2003 年からは大阪大学大学院人間科学研究科教授。2012～2014 年、2016～2018 年の 2 期に渡り副研究科長を務めた後、2020～2022 年には研究科長。ご退職後の現在も、西日本旅客鉄道株式会社の鉄道本部安全研究所技術顧問として、ヒューマンファクター研究を継続されている。



50th ANNIVERSARY 大阪大学大学院人間科学研究科 安全行動学研究分野 人間科学センター 第51回人間科学セミナー

臼井 伸之介 教授 最終講義 安全ヒトすじ45年 ～人間は変わる、人間は変わらない～

概要：人は誰でもミスをおかします。ただしそのミスが、人の生命や健康を脅かすような事故・災害につながるのではありません。それは防ぐことができます。私はこれまで、ヒューマンエラーや事故発生のメカニズム・ヒューマンファクター・研究に長年関わってまいりました。本講演では、自身の思いや取り組み、これまでの教育・研究について振り返るとともに、人間とは何かについて改めて考えてみたいと思います。

2022年3月15日(火)
15:00～16:30

会場：大阪大学人間科学部本館
5階 キャンピオホール

会場へお越しの方は、本館1階正門左側からお入りいただき、5階までお越しください（事前申し込み不要）。
オンラインでの参加もご希望の方は、以下のURLまたはQRコードからお申し込みいただく。当日、アクセス先をメールでお知らせします。
<https://forms.gle/FK3u8wKdL5NtGaeDnZ9>

お問い合わせ先：中井 寛 h.nakai.human@oita-u.ac.jp

講演者

臼井 伸之介 教授

安全行動学研究分野

雨、暴力、権力 首長制と階梯式年齢体系をめぐる長い拡大事例研究

2022年3月25日



【最終講義】

栗本英世先生は、長年にわたり、南部スーダン（現在の南スーダン共和国）とエチオピア西部でフィールドワークにこだわりつつ、西ナイル系の民族集団の調査研究に従事されました。内戦や民族紛争、難民、人道援助といった研究課題や、植民地史料を含む歴史文書の研究と、現在時制の民族誌的研究を統合する手法を、日本の人類学界において確立する上で、栗本先生はパイオニア的役割を果たしました。その影響は、人類学以外の学問分野の研究者にも及んでいます。

最終講義では、1986年に出版された論文「雨と紛争——ナイル系パリ社会における首長殺しの事例研究」の続編として、雨の首長の殺害によって繰り広げられた暴力の民族誌を拡大し、36年に渡って若者の年齢組間の紛争が、集落間の紛争に発展した過程を描いてきました。こうした動態的過程は、どこか均衡に達し、安定するのではなく、永續することが主張されました。そして、その過程は、社会に内在する要因だけでなく、外在する国家レベルのさらには国家を超えた領域の要因にも規定されていることが明らかになってきました。

栗本先生、長年人科のためご尽力いただき、大変お疲れさまでした。

【略歴】

1985年京都大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。東京外国語大学助手、国立民族学博物館助教授などを経て2000年に大阪大学大学院人間科学研究科に助教授として着任後、2003年より教授。大阪大学グローバルコラボレーションセンター長、大阪大学大学院人間科学研究科長、大阪大学副学長を歴任し、現在は人間文化研究機構理事。専門は社会人類学とアフリカ民族誌学。南スーダンのパリ人とエチオピア西部のアニユワ人を対象とする長期のフィールドワークに従事した。研究テーマは内戦と民族紛争、難民、食料安全保障、人道援助、平和構築と戦後復興など。



講演者

栗本 英世 教授

グローバル共生学講座

◆1.2 まなびのカフェ（箕面市国際交流協会（MAFGA）との交流）

未来共創センターでは、箕面市国際交流協会（MAFGA）等の学外の組織と協力し、参加者とともに語りあう、交流型の学びの場「まなびのカフェ」を実施しています。2021年度は、箕面市国際交流協会で開催された映画上映イベントに学生と共に参加し、技能実習生として来日する外国人の方々をとりまく環境や困難について語りあう交流会の実施およびアンケート集計を実施しました。

日付	タイトル	場所	本学からの参加者
2022年 2月18日、 2月26日	『海辺の彼女たち』 映画上映会・意見交流会	箕面市国際交流協会 （MAFGA） およびオンライン	河野真結（人間科学部3年）・ 織田和明・小笠原理恵・ 木村友美・川渕千恵子

プログラム

<1日目> 映画『海辺の彼女たち』上映会

2022年2月18日

会場：箕面市国際交流協会（MAFGA）

内容：映画上映『海辺の彼女たち』、
藤元明緒監督とのトークセッション

<2日目> 映画の感想交流会

2022年2月26日

会場：オンラインでの開催

内容：映画『海辺の彼女たち』を鑑賞後、技能実習生に関する意見交流会を行う



◎参加者

箕面市国際交流協会（MAFGA）のボランティア・賛助会員や大阪大学の学生、職員など25名。

◎参加した学生の感想

当日の運営の手伝いや、意見交流会での意見のまとめ、アンケート内容の集計等を行ってくれた河野真結（人間科学部3年）さんによる感想です。

今回の映画上映会に参加して、1つの映画に対する他の人の考えに触れる機会があり様々な事柄への視野が広がった。まず、映画上映のあとに監督に質問できたことは、貴重な経験だった。自分以外の人の率直な感想や監督の真意を鑑賞直後に知ることができ、映画への理解が深まったように感じる。

その後、映画の感想交流会に参加したことも、MAFGAの担当者の方々の映画上映への想いを感じ、単に映画を観るだけでなく多文化共生について考える重要性を感じさせるものだった。感想交流会では、自分とは異なる年代や経歴の方々がどのような場面でどう感じたかを知ることができ新鮮であった。私自身、はじめはどこか“遠くの話”として観ていた部分があったが、まわりの人々の感じ方・感想を知るにつれ主人公達に感情移入するようになっていった。この経験から、他のニュースや出来事でも“他の人はどう感じるか”を考える機会が増えたと思う。また映画の中でもあったように、海外からの技能実習生や留学生など、難しい立場にいる人はたくさんいると知った。そのような人々を直接助けることは多くの人にとって難しいことだが、地域の誰もが気軽に行くことができる場所でこうした状況について理解を深める機会があること自体が意義深いと感じた。

◆1.3 学生企画によるプロジェクト

学生主催のイベントです。「ブックトーク」や「学生プロジェクト」を通じて新しいつながりを生み出しました。

日付	タイトル	テーマ	話題提供者
2020年 7月3日	ランチトーク特別編・ブックトーク01 風景との出会いの中で展開され続ける「写真実践」 写真家たちの眼を通じて捉えられた、ひとびとの暮らし	写真実践	吉成哲平・冷 昕媛・ 陸口雄斗
2021年 8月23日	ブックトーク02 居場所・つながり・語り『子どもたちが つくる町一大阪・西成の子育て支援』から 広がって	居場所・つながり・ 語り	松本 渚・中西美裕・ 木村友美・村上靖彦・ 織田和明
2021年 3月27日	学生プロジェクト 人間科学部四学系交流会	学際的研究	橋本捷矢・藤井拓海・ 千草育実・桑原 壽・ 中谷碩岐

ランチトーク特別編

ブックトーク01

風景との出会いの中で展開され続ける「写真実践」

日 時：2021年7月3日（土）14:00-16:00

場 所：オンライン開催（Zoom）

参加者：55人

プレゼンター：

吉成 哲平（大阪大学・博士後期課程）

コメンテーター：

冷 昕媛（大阪大学・博士後期課程）

陸口 雄斗（大阪大学・学部4年）



生活を写す写真実践

未来共創センターではランチトークの特別編として教員や学生が出版した本を紹介し、語り合う「ブックトーク」を開催しました。第1回で取り上げたのは環境行動学分野の吉成哲平さんの卒業論文をもとにした『写真家 星野道夫が問い続けた「人間と自然の関わり」』（大阪大学出版会）です。吉成さんは自身の写真家としての経験も踏まえながら星野道夫、東松照明、畠山直哉などの写真家の足跡を探求し、そして彼ら生涯を通じてレンズ越しに捉えた自然、歴史、そして人々の暮らしを明らかにしていく「写真実践」という独自の方法論で研究を進め、優れた本を執筆しました。一瞬を捉える写真ですが、しかし写真家が撮り続けることで歴史を形作り、私たちの世界の背後にある大きなつながりを写していきます。吉成さんは自身の身体経験を踏まえて、生きている生活者の現場とその奥にある普遍的な自然や歴史を長年の営みによって捉えるものとして写真家を描き出

し、そして彼らが捉えた壮大な世界を私たちにわかりやすく伝えてくれました。

眼には見えないけれどあるものを写す：コメンテーターそしてフロアの皆様と

コメンテーターはコンフリクトと共生分野の陸口雄斗さん、吉成さんと同じ環境行動学分野の冷昕媛さんです。

陸口さんは共に同じ時間を生きるものである人間と動物を大きな生命を捉える星野の生と死をめぐる記述が印象的だったことや吉成さんの研究の広い視野についてコメントし、写真実践という方法論などについて質問しました。

冷さんは中国でも生命体の本質を見抜く星野道夫の本が人気であること、チベットの遊牧民とユキヒョウを例に挙げながら生物多様性の保全の現場の難しさをお話しし、写真実践の根源的な問いは何か、現代社会において人間と自然は分断されているのではないかと質問しました。

写真実践は眼には見えないけれど確かにある時間、空間的なつながりを写す営みです。質疑応答を通じて吉成さんは写真実践とはカメラで撮影する際のファインダー越しのためらいに働く思索や写真家の撮影する土地に対する思いを、写真やテキストの分析、そして同じ土地で自分も撮影することを通じて明らかにしていくことであると語りました。

フロアの方からも写真実践について、本を執筆することについて、生活者という概念についてなど興味深い質問が寄せられました。出会った人々のことやその土地で経験した感覚を見つめ、それを写真や論文の形で吉成さんが表現していることが議論を通じて伝わってきました。

人間科学というフィールドの大きな広がりが見える会となりました。きっとこの日の議論は遙か遠くまで続いていくものだと思います。

ブックトーク02

居場所・つながり・語り

『子どもたちがつくる町一大阪・西成の子育て支援』から広がって

日 時：2021年8月23日（月）17:00-19:00

場 所：オンライン開催（Zoom）

参加者：34人

スピーカー：

松本 渚（大阪大学・博士後期課程）

中西 美裕（大阪大学・学部4年）

木村 友美（大阪大学・講師）

村上 靖彦（大阪大学・教授・著者）

司 会：織田 和明（大阪大学・特任研究員）

主 催：哲学の実験オープンプロジェクト

共 催：大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター



個別の到達する普遍性へ

人間科学研究科では教員や学生が出版した本を紹介し、語り合うブックトークを開催しています。今回は村上靖彦先生の『子どもたちがつくる町一大阪・西成の子育て支援』（世界思想社）を取り上げました。大阪の西成で調査・活動している学生の松本渚さんと中西美裕さん、世界各地のフィー

ルドで人々の栄養を調査してきた木村友美先生、西成や看護などの現場を現象学で分析してきた著者の村上先生、そして学内外からご参加いただいた皆様と共に支援の現場について、調査・研究という営みについて議論を深めました。

木村先生は本の概要を紹介しながら、村上先生に本を作っていく過程や、インタビュー調査について尋ねました。お話の中から見えてきたのは村上先生が西成の実践者の方々と長い時間を共に過ごし、深いリスペクトを持って実践の構造を取り出そうとしていることです。村上先生の手法は一般的な量的調査ではこぼれ落ちてしまうものを救い上げるための工夫の中で展開していることが見えてきました。

町を、日常の風景を書く

受け止める人がいて、表現が可能になる：スピーカーそしてフロアの皆様と

中西さんは西成高校の居場所カフェをフィールドに研究をしています。居場所づくりは行政の後押しを受けて拡大していますが、居場所とは何か、支援とは何かをよく考えていないために子どもたちの SOS を見過ごしてしまうような事例も見られることを中西さんは危惧しています。西成の実践は居場所づくりという概念が生まれる前から始まって発展して行ったものです。支援のつながりは継承され、居場所の外にも広がっています。この実践を「西成マジック」と捉えずに、同様の取り組みはどこでも可能なものとして広めていく必要があります。

松本さんは西成のココルームと釜ヶ崎支援機構に所属し、西成の様々な現場で活動されています。松本さんは SOS も含めた広く表現を受け止める人の重要性についてお話しし、村上先生にインタビューデータの分析を中心にした調査方法について質問しました。村上先生の研究手法は現象学という枠組みに基づきながらも、西成に生きる人々が共有する土地の歴史や人権への意識にアプローチするために、柔軟に変化を続けていることが明らかになっていきました。フロアからも方法論についての問いが出され、研究者が実践の現場の出来事を言語化していくことについて考察が深められました。私たちは様々な表現を交わしながら生きています。表現を受け止め、背後に広がる普遍性を明らかにすることこそが研究者の役割です。今回は社会の中で生きる研究者としてのあり方を見つめ直す機会になりました。

学生プロジェクト 人間科学部四学系交流会

2022 年 2 月 6 日（日）12:00-14:30

場 所：オンライン開催（Zoom）

参加者：13人

企画者：中谷 碩岐（大阪大学・学部 3 年）

話題提供者：橋本捷矢・藤井拓海・千草育実・
桑原 壽・中谷碩岐



実施内容

2022 年 2 月 6 日（日）、Zoom にて、大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター主催・未来共創センター学生プロジェクト企画「四学系交流会」を行った。この交流会は、2 年次秋

冬学期以降に相互の専門領域について触れる機会が少ないという人間科学部の現状を受けて、それぞれの学系の枠を超えた研究発表及びディスカッションを行うことで、普段交流のない専門領域同士の交流を図り、相互理解を深めることを目的として開催されたものである。当日は、人間科学部の四学系の学部生を中心に、行動学系や共生学系の教員、共生学系の大学院生など、様々な所属の方に参加して頂くことが出来た。以下、イベントの様子を報告する。

前半部では、共生・行動・教育・社会学系の発表者が、それぞれ学系紹介と研究発表を行った。

最初に、主宰の中谷（共生の人間学・3年）が、この交流会全体の意義について、人間科学部における共生学系の立ち位置や、そこで共生の人間学という哲学・思想系の研究室が果たし得る役割から発表した。その後、専門とする哲学者ジャック・デリダの思想について研究紹介を行った。

次に、橋本（社会心理学・3年）が、社会心理学という領域の基本的な特徴や、利他行動と自尊心の関係という自身の研究を紹介した後、神経生理学における意識の扱いについて発表した。

藤井（教育文化学・3年）は、発表者の中で唯一フィールドワークを研究手法とするという背景から、学系紹介と共に、参与観察の手法や特徴、難点などの紹介を行った。

最後に、千草（社会学系文化グループ・3年）が、「社会」と「個人」の関係に着目して、社会学における「社会」についての幾つかの思想を紹介した後、ハリウッド映画のシリーズ作品におけるヒロインの描き方の変遷を社会的に分析するという自身の研究について発表した。

発表が終わった後半部は議論をフロアに開き、質疑応答及びフリーディスカッションを行った。それぞれの領域の研究手法やゼミ形式、卒論の課題設定の時期や大学院進学について、現在の研究テーマを扱おうと思った動機など、お互いの研究活動について活発に情報交換を行った。

プロジェクトの考察

今回発表した学生の専門に限定しても、文献調査を行うフランス哲学思想研究、量的研究による社会的行動の動機と自己認識の関係究明、高校での参与観察に基づく探求学習の可能性探究、そして映像分析によるハリウッド映画と社会運動の関係究明と、同じ学部の学生とは思えないほど主題、手法共に様々であり、改めて人間科学部の専門領域の多様さと、交流を通じた新たな学知の創造の可能性を感じた。ただし専門について言えば、初回ということもあってそれぞれの領域における基礎的な事項に関する情報交換が多く、相互の専門を吸収して自分の領域と接合することや、学際的な共同研究を行うには、自身の専門性の向上と他領域への理解の双方の向上が不可欠であると感じた。しかし、基礎的であるが故に重要な知識を共有できたこと、そしてそうした将来の交流活動の端緒を開くことが出来たという点で、本プロジェクトは一定の成果を上げることが出来たと考えられる。



2 大阪大学オムニサイト協定 OOS

2021年度は新たに3団体とオムニサイト協定を締結し、計22団体と人間科学研究科、協定団体間のネットワークが形成されています。新型コロナウイルス感染症への影響を考慮し、オンラインを活用して活動、交流を行いました。

◆2.1 OOS協定 2021年の新規協定件数： 3件



吹田市社会福祉協議会
担当教員：渥美 公秀・宮前 良平



大阪トヨタ自動車株式会社
担当教員：稲場 圭信



一般社団法人パースペクティブ
担当教員：森田 敦郎

2020年度までに締結された協定（締結日順）

一般社団法人全国自治会活動支援ネット
一般社団法人今井町大和観光局
パナソニックホームズ株式会社（旧パナホーム）
NPO 法人北いわて未来ラボ
ジャトー株式会社
ダイハツ工業株式会社ダイハツ保健センター
大阪市教育委員会
中銀インテグレーション株式会社
愛媛大学社会共創学部
一般社団法人地域情報共創センター
吹田市社会福祉協議会

一般社団法人全国寺社観光協会
岩手県九戸郡野田村
新安世紀教育安全科技研究院
NPO 法人日本災害救援ボランティアネットワーク
NTN 株式会社
一般社団法人タウンスペース WAKWAK
共和メディカル株式会社
西予市野村地域自治振興協議会
NPO 法人おおさかこども多文化センター
大阪トヨタ自動車株式会社
一般社団法人パースペクティブ

調印式① 吹田市社会福祉協議会

2021年7月21日、大阪大学人間科学研究科にて、社会福祉法人吹田市社会福祉協議会と「大阪大学オムニサイト（OOS）」協定の調印式を行いました。



社会福祉法人吹田市社会福祉協議会は、「地域福祉を推進する団体」として住民や各種団体から組織された民間団体です。「誰もが安心して暮らせるまち」を目指して、さまざまな団体・組織と連携しながら活動をされています。

調印式は新型コロナウイルス感染症による2度の延期の末に、2021年7月21日に無事に開催されました。調印式では初めに大阪大学人間科学研究科・山中浩司教授（未来共創センター長）から開催の宣言がありました。その後、研究科長の臼井伸之介教授よりご挨拶

ととともに、今回のOOS協定締結とこれまでの協働に対する感謝と今後のさらなる活動の発展への期待が語られました。

「今回での協定では、社会福祉法人吹田市社会福祉協議会を結ぶことができ嬉しく思っております。吹田市社会福祉協議会様とは、2018年に発生した大阪府北部地震における救済活動を中心に、渥美先生をはじめとした多くの教員や学生が様々な協働プロジェクトでご一緒させて頂いております。現在はコロナ禍で大変な状況であります。高齢の方にお手紙を送る「お手紙プロジェクト」の実施など、多くのご助力を頂いております。これまでの協力に深く感謝いたします。この協定がお互いの活動をより活性化させ、広く社会に貢献をするとともに、大阪大学の研究が大いに向上することを願っております。今後ともさらなる連携をよろしくお願い致します。」（人間科学研究科長・臼井伸之介教授）

「吹田市社会福祉協議会は昭和26年に設立し、今年で70年を迎えました。この70年間、誰もが暮らせる街づくりを地域住民とともに取り組んでまいりました。この記念の年に大阪大学とOOS協定を締結し、共に地域福祉活動を推進できることをとても嬉しく思います。また大阪大学人間科学研究科も来年創立50年を迎えると同様にあります。50年を迎える前に当協議会を仲間に加え入れたことを感謝申し上げます。3年前に忘れもしない大阪府北部地震が発生しました。当協議会では初めて災害ボランティアセンターを設置し、運営し、被災者支援に取り組みました。災害ボランティアセンターの設置に当たっては、渥美先生に大変貴重なアドバイスを頂きました。また大阪大学も被災したにも関わらず、連日、学生さんと共に救援活動をしていただき、OOS協定のネットワークを活かして、資材や支援物資を調達して頂くなど、多大なご支援を頂きました。改めて感謝を述べさせていただきます。このコロナ禍で改めて住民同士の繋がりがクローズアップされています。制度やサービスは社会情勢によって変化しますが、住民同士の繋がりは社会情勢に関わらず、いつの時代も普遍的なものです。コロナ禍においても大阪大学の学生さんと福祉委員が連携して、高齢者との交流に取り組んだことが各メディアで報道されたのもその裏付けかと思います。また新たに完成したグローバルヴィレッジ津雲台では宮前先生をはじめ、学生さん、OOS協定締結団体や地元の福祉委員が連携して福祉コミュニティ作りに取り組むはじめ、住民同士の繋がりは確実に

強くなりました。今後も OOS 締結団体と提携、協働した地域活動に取り組めることをとても楽しみにしております。」
(社会福祉法人吹田市社会福祉協議会会長・櫻井和子様)

「吹田市社会福祉協議会様とご縁ができたのは 3 年前の大阪府北部地震でした。当時は私が海外にいたこともあり、直接一緒にボランティアはできませんでしたが、渥美先生や学生たちの取り組みを聞いて、こんなにも学生・教員が地域で活動ができるんだと驚き、私自身も直接関わりたいと感じたことを今でも覚えています。昨年、コロナが流行した時に学生から「コロナ禍でも地域に出て活動したい」という無茶振りを吹田市社会福祉協議会の新宅様に相談したところ、アドバイスを頂いて、「お手紙プロジェクト」が始まったと記憶しております。またグローバルヴィレッジ津雲台では、地域に開いた活動も行っていきたいと新宅様に相談したところ、「こちらで地域住民さんとお繋ぎできます」と受けていただき「情報共有会議」を行うことになりました。こういった取り組みの中で私自身が色々なことを考えさせて頂き、多くのことを学ばせて頂きました。新宅様は「まずは住民さんが何を思っておられるのか」と最初に仰られる。地域に出て実践をするということとはこういうことなのかと、常に学ばせて頂いております。

吹田市社会福祉協議会様とこの度 OOS 協定を結ばせて頂くことで、私自身さらに学ばせて頂き、また、様々なことを実践という形で、または研究という形で吹田市の中で展開でき、貢献できるのではないかと期待しております。思えばこんなに近くにいるのに、今までこういった関係性が十分できていなかったことを不思議と感じておりますが、今回の調印式を機に今まで以上に硬い絆と一緒に吹田市の活動ができればと考えております。

(人間科学研究科パートナー担当教員・宮前良平助教)

調印式② 大阪トヨタ自動車株式会社

2021 年 7 月 19 日、大阪大学人間科学研究科にて、大阪トヨタ自動車株式会社様と「大阪大学オムニサイト (OOS)」協定の調印式を行いました。



大阪トヨタ自動車株式会社様は、大阪府内を中心に新車・中古車自動車の販売を行う会社です。近年は SDGs にも積極的に取り組まれています。

調印式は新型コロナウイルスの蔓延により延期がつづき、2021 年 7 月 19 日ようやく調印式を行うことができました。調印式では、まず大阪大学人間科学研究科・山中浩司教授（未来共創センター長）が開催宣言をし、その後、人間科学研究科長の臼井伸之介教授が開会挨拶を行いました。開会

挨拶では OOS 協定締結への感謝と今後の活動の更なる発展への期待が述べられました。

「大阪大学人間科学研究科附属未来共創センターの取り組みの一つである OOS オムニサイト協

定は産官、社会学連携により社会の中の企業、財団、地方自治体、NPO、NGO など様々な団体と学内外でセミナーやイベントを行い、さらにボランティア活動など社会的活動を行う場となるものです。このたび大阪トヨタ自動車株式会社様と OOS 協定を結ぶことができました。今回の協定は本研究科にとって記念すべき 20 番目の OOS 協定となりました。大阪トヨタ自動車株式会社様には、これまで稲場先生が中心となり「IT を用いた防災、見守りに関する共同研究」や、地域資源と IT による減災見守りシステム『たすかんねん』の設置に関する協議、安全安心の街づくりのイベント実施など、大変ご尽力を頂いております。これまでのご協力に深く感謝いたします。今回の協定が今後のお互いの活動をいっそう活性化させ、広く社会に貢献し得る取り組みとなることを期待しております。更なるご協力をよろしくお願い致します。」（人間科学研究科長・臼井伸之介教授）

「本日ここに大阪大学オムニサイト協定を無事締結できたことを心から感謝致します。今日に至る経緯をご紹介申し上げますと、私どもの生誕の地でもあり、本社があります大阪市福島区と昨年 1 月に包括連携協定を締結しました。当時の区長より『たすかんねん』を紹介頂きまして、そこから稲場先生とのお縁をいただき、本日へ繋がっております。連携の一環として昨年 11 月に福島区のイベントである「ふくしまてんこもり 2020」の中で私どもが防災食の配布行いました。その際に大阪大学の皆さんに大変協力を頂きました。遅ればせながら感謝致します。私どもの経営理念の中には「社会とともに」という言葉があります。地元から愛される、地元から必要とされる企業を目指して地域と連携し、防災や SDGs へと一生懸命取り組んでいきたいと考えております。またカーボンフリーといった一企業では解決できない社会課題が山積しております。大阪大学の学生の皆様や先生方のお知恵をお借りしながら共生の和を広げて、社会課題に解決に繋げていければと願っております。最後に 1 日でも早く、社屋の屋上に『たすかんねん』を設置できればと考えております。本日はありがとうございました。今後とも宜しくお願い致します。」

（大阪トヨタ自動車株式会社代表取締役社長・小西俊一様）

「この度は大阪トヨタ自動車株式会社様と協定を締結できたことを大変嬉しく思っております。大阪トヨタ自動車株式会社様の設立は 1927 年であり、もう少しで 100 周年を迎えるということで、本社ビルの屋上に設置される予定の『たすかんねん』の前でも盛大にお祝いできればと思います。また社屋は避難所にもなっているということで、様々な取り組みができればと思っております。本日参加いただいた NPO 法人日本災害救援ボランティアネットワーク常務理事の寺本様とも、先程、紹介がありました福島区での「ふくしまてんこもり 2020」のイベントで防災展示を学生と一緒に実施させて頂きました。今後は、学生と頻りに交流していただき、企業と社会と共に生きるあり方を学ばせることができたかと思っております。今後とも宜しく申し上げます。」

（人間科学研究科パートナー担当教員・稲場圭信教授）

2021年11月1日、大阪大学人間科学研究科にて、一般社団法人パースペクティブと「大阪大学オムニサイト（OOS）」協定の調印式を行いました。



一般社団法人パースペクティブは、10,000年もの間日本の風土で使用されてきた漆を中心軸に、工藝に受け継がれた「人と自然との関係」にヒントを学び、社会に調和と、人に感性を、そして、地球に持続可能な人のあり方をもたらすタネを蒔く活動をしています。

新型コロナウイルスの感染状況が落ち着きつつある中で、無事11月1日に調印式を開催することができました。調印式では初めに大阪大学人間科学研究・山中浩司教授（未来共創センター長）から開催の宣言がありました。その後、研究科長の臼井伸之介教授よりご挨拶とともに、今回のOOS協定締結とこれまでの協働に対する感謝と今後のさらなる活動の発展への期待が語られました。

「人間科学研究はもともと文理融合という学際的な研究科ということで49年前に設立され、来年には50年の節目を迎えようとしています。そういった流れから「学際性」「国際性」「実践性」を理念としています。「実践性」というのは大学で培った知識を社会と一緒にになって「共創の知」を作る。そして、その「共創の知」をそれぞれのフィールドへと持ち帰り、活用して頂く循環を目的としています。そういう点ではパースペクティブ様の「行為の循環」という点では合致しているのではと感じております。パースペクティブ様はこれまでに「行為循環型モノづくり」「自然と人間との共生」をキーワードに京都市の京北地区や奈良県の曽爾村などで森づくりとモノづくりをつなげる活動を行なってきました。現在、大阪大学は森田先生の研究室の木材の循環を明らかにするマテリアルフロー調査の実践において、貴重なフィールドを提供して頂いております。これまでのご尽力に大変感謝しております。今回の協定がお互いの活動をより一層活性化させ、広く社会に貢献し、また新たな共創の知を生み出す取り組みとなることを期待しております。今後さらなる連携と協力を宜しくお願い致します。」

（人間科学研究科長・臼井伸之介教授）

「本日オムニサイト協定を締結できたことを心から嬉しく思い、感謝申し上げます。この始まりは京都繊維大学で行われた Future of Design Education というワークショップで森田先生に出会ったことでした。このワークショップの中での私は「これからの社会で人がまだまだモノを生み出しながら、この地球で生きていくためには工藝から学ぶことがあるのではない」ということをお話ししました。工藝の「藝」という旧漢字は人が木の苗を捧げ持って植える象形文字です。この文字は人が創造する上のあるべき態度を示していると私は考えてきました。共同代表の堤は家業の漆の精製業者として人と自然の育てた樹液の生々しさと向き合う日々の中で、このことをよく理解している人だと思っています。漆をはじめ、日本伝統のモノづくりの生態系はこの1・2世紀の間にグローバル化と工業化の影響を受けて、大きな綻びを見せています。里山もまた同じ時期に同じ影響を受けて取り残されて、今の姿があるように思います。私たちの活動拠点の京北地域は、京都中心地から車で1時間ほどの距離にある山師の郷です。平安京創設の時に木材供給地として桓武

天皇の派遣した山師の一族によって切り開かれました。この地域で一般社団法人パースペクティブは森を育むことと、モノを作る事がひと続きに営まれる地域社会を模索しています。京北地域と平安京の関係性が物語るように自然は文化の礎であって、人の文化創造がまた、自然の新陳代謝を促すという意味で循環的で、気候風土や地域の固有性が生かされる社会への模索でもあります。この活動の方向性や思想の全体を「工藝の森」と私たちは呼んでいます。パースペクティブはトヨタ財団の支援を受けてこの思想を具現化する実験の場を用意しています。片方の車輪としては工藝素材を育む森づくりにすでに着手しておりますが、もう片方の車輪としてファブビレッジ京北というメーカースペースを作るための物理的な場所として準備中です。森とモノづくりがどのように繋がっているのかを明らかにして、またどのように繋がるのが自然なのかを考え、実験し、手を動かす、そのリアルな経験を通して綻んだつながりを再編成していくこと、それはファブビレッジの活動の目的です。そうした繋がりを細やかに描き出すために大阪大学 Ethnography Lab の専門性に助けられています。またこうした探索の場や地域コミュニティを研究のフィールドとして学生たちに提供していくことに弊社としてもとても意義を感じています。この協業によって可能となる活動は土着的で草の根的な活動である一方で、工藝の藝の旧漢字が示すような人の創造的な活動と自然のリズムが一体となった日本的な世界観を見直すという意味で世界の中でもユニークな粹割を果たしていくのではないかと考えております。この協業のいく末を私自身とても楽しみにしております。今後ともどうぞ宜しくお願い致します。」（一般社団法人パースペクティブ・松山幸子様）

「松山さんのおっしゃった通り、Ethnography Lab とパースペクティブは、作ることと、エスノグラフィー、もしくは人文社会学的な知を用いて知ること、を結びつけた新たな研究と実践を切り開こうとしています。現在気候変動の悪化が極めて厳しく、2050年までの二酸化炭素の排出の100%の削減が求められる状況になっています。このような気候変動対策を実現するためには経済活動をローカル化し、パースペクティブの工藝の森が描くように、人々が作ることの価値を自然の再生に繋げていくような試みが不可欠です。しかし現状そのような試みが必ずしもうまくいっていないだけでなく、アイデアも十分にあるとは言えないと思っています。パースペクティブの工藝の森の構想は日本の伝統的な工藝に着想を得つつ、今気候変動対策として必要とされている経済のローカル化、もしくは regenerative な、自然再生するような経済の構築にとって極めて重要なプロトタイプ、もしくは実験的な試みになるのではないかと考えています。私とモハーチ先生は気候変動に関する研究をしてきたわけですが、このことが我々にとってパースペクティブさんと協業させて頂く第一の理由になっています。それと同時にパースペクティブの皆さんと私たちと Ethnography Lab では共に新しいタイプの学問・知のあり方を模索しています。それは人文社会科学の批判的な知識と作る実践を結びつけた新しい知のあり方です。工藝の森に代表される「循環型の経済」と「作ることと人文社会科学を結びつけた新たな学問のあり方」、この二つがパースペクティブさんと Ethnography Lab の協業の柱となっています。いずれもこれまでに前例のないような新しい試みになっています。そのため、様々な困難や発見、そして経験を一緒にさせて頂いております。これからもこのようなフロンティアを切り開いていくような活動を一緒にやらせて頂けること楽しみにしております。」（人間科学研究科パートナー担当教員・森田敦郎教授）

活動報告

大阪トヨタ自動車株式会社本社にて独立電源通信装置たすかんねん 設置完成披露式が執行されました

大阪トヨタ自動車株式会社様と本研究科は、2021年7月19日、大阪大学オムニサイト（OOS）協定を締結しています。その調印式のご挨拶の中で小西俊一社長が独立電源通信装置たすかんねんを本社ビルに設置すると明言されました。

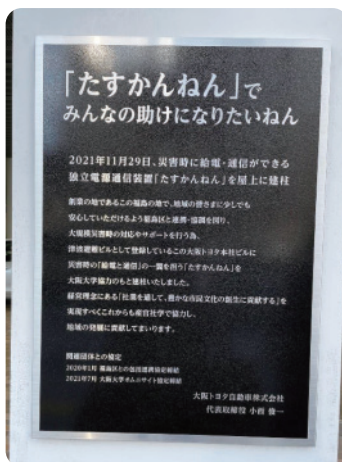
「社会と共に」という企業理念の如くに、地域の安全安心のために津波避難ビルに指定されている本社ビル（大阪市福島区）の屋上に独立電源通信装置たすかんねんを設置、2021年11月29日（月）、完成披露式が執行されました。来賓として大阪市福島区から深津友剛区長、福島5丁目西町長会から奥野昌久会長、トヨタT&S建設株式会社から田淵博也大阪支社長、大阪大学大学院人間科学研究科から稲場圭信教授、一般社団法人地域情報共創センター（OOSパートナー）から小島誠一郎代表理事、認定NPO法人日本災害救援ボランティアネットワーク（OOSパートナー）から寺本弘伸常務理事、NTN株式会社（OOSパートナー）から石川浩二執行役員、勝又龍介技術部長、ソフトバンク株式会社から二神健一郎様ほかが出席しました。



式典では、独立電源通信装置「たすかんねん」の説明と給電などのデモンストレーションに加えて、たすかんねん筐体のステッカーに記されている未来共生災害救援支援マップ（略称：災救マップ。大阪大学の知的財産）のQRコードをタブレット端末で読み込んで、災救マップを活用するデモンストレーションも行われました。

今回の独立電源通信装置たすかんねん設置は民間企業による社会実装第一号です。OOS協定調印式から僅か4か月という短期間でたすかんねん設置完成、その有言実行とスピードに驚かされます。ビルの1階エントランスの柱には、銘板（「たすかんねん」でみんなの助けになりたいねん）が設置されています。

このたすかんねん設置を機に、OOSパートナーとしてさらに様々な取り組みを共に進め、社会に貢献して参ります。



若い世代と一緒に外国にルーツのある子どもたちの新しい支援を

NPO 法人おおさかこども多文化センター

理事長 濱名 猛志 様 / 副理事長 村上 自子 様 / 事務局長 橋本 義範 様

インタビュアー：人間科学研究科博士後期課程 大川ヘナン

NPO 法人おおさかこども多文化センター（通称：オコタック）さんは、現在外国にルーツを持つ子どもたちの包括的な教育支援を展開しており、サタデークラスでの日本語・学習支援教室や様々な研修会、教育相談事業（22年3月27日大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラムと共催の「外国人家族のための進学相談会」もその一つ）などを行っている NPO 法人です。OOS との事業では人間科学研究科附属未来共生センター特任教授の榎井縁先生と共に外国にルーツを持つ子どもたちへの支援を展開していらっしゃいます。今回はオコタックさんの理事長の濱名さん、副理事長の村上さん、そして、事務局長の橋本さんにインタビューを行いました。主に OOS 協定を結んだきっかけ、今後の協働について話を伺いました。



サタデークラス

毎週土曜日の学習支援教室で、日本語や学習支援をしている場面

大阪大学と OOS 協定を結んだきっかけは何でしたか？

最初のきっかけは山本晃輔先生（当時、未来共創センター講師）との話の中で、「公立の学校で IT を活用して、外国ルーツの子どもたちを支援する方法はないか」というところから始まりました。オコタックには IT の活用に関する経験が乏しく、大阪大学の力を借りることで、何か協働できないかということになりました。そこでオコタックの方で「この学校ならこんなことができる」というのをピックアップして、2020 年の 1 月に府立高校で「ITC の遠隔授業の試行」ということをやりましょうということになりました。オコタック側では学校との調整を行い、機材に関する知識がなかったので、それは大阪大学に任せるという形になりました。それはちょうど新型コロナが流行り始める直前でした。その取り組みの後に「いろんな知恵を借りながら、新しい取り組みがで

きる」プラットフォームが大阪大学オムニサイト協定であるという話を頂いて、それだったらオコタックも参加をしようという話になりました。」



えほんのひろば 世界の文字体験
世界の文字で子どもたちが自分の名前を書いてみる体験。
外国出身の高校生たちが優しく教え、親子で楽しんでいる場面。

今後オコタックさんはどのような展開を考えていますか？

「オムニサイト協定を結んだ直後に新型コロナが急激に広まったこともあり、オムニサイトを冠した企画はできていませんが、大阪大学とは様々な活動は実施しています。その一つが夜間中学校への見学会がありました。こちらの企画は榎井先生と岡部先生と一緒に実施しました。これからの展開としては大阪大学の若い方々とより繋がっていきたいというのがあります。我々には外国につながる子どもたちと関わるノウハウやネットワークは持っていますが、それをなかなか社会に広められずにいます。ですので、大阪大学の若い方々のパワーを借りながら事業を展開したいという思いがあります。現在、東京などで若い当事者の方々によって立ち上げられた新しいタイプのサステイナブルな NPO 法人があります。それは当事者目線からの支援や新しいテクノロジーを活用しながら展開しているという特徴を持ち、我々の団体とは違う形で育っています。そのような展開を大阪大学の若い方々と一緒にできればと考えています。」

今後は OOS 協定でどのような取り組みを期待されていますか？

「OOS 協定では様々な企業団体が集まっています。そこで私たちの外国につながる子どもたちへの活動と同じ理念を持つことができる企業・団体と繋がりたいという気持ちがあります。我々はこれまで狭い範囲で活動を来ましたので、我々の理念に共鳴し、我々にはない力を持っている企業・団体と出会いたいという気持ちはあります。」

今回のオコタックさんの方々とインタビューの中で印象的だったのは「若い世代を巻き込みながら、新しい形で外国にルーツを持つ子どもたちの支援を広げていきたい」という思いを強く感じました。オコタックさんのこのような強い思いを大阪大学の学生や企業・団体と結びつけることができれば、より新しい形の活動が展開できるのではと楽しみに感じました。お話ありがとうございました。

* 掲載写真は全て新型コロナが流行する前の写真となります。

インタビュー 2

外国につながる子どもたちが自分らしく生きる社会を目指して

大阪市教育委員会

指導部 人権・国際理解教育グループ 首席指導主事 富士浜 真二 様

インタビュアー：人間科学研究科博士後期課程 大川ヘナン

大阪市教育委員会は、現在「未来共生キッズ・ジュニア育成プログラム⁽¹⁾」を人間科学研究科附属未来共創センター特任教授の榎井縁先生と共にプロジェクト展開していらっしゃいます。今回は大阪市教育委員会の富士浜さんにインタビューを行い、主に OOS 協定を結んだきっかけや、取り組み、そして、今後の目標について伺いました。

(1)未来共生キッズ・ジュニア育成プログラムは、外国につながる子どもたちをはじめとする、すべての子どもたちが自分らしく生きることで、よりよい社会を創り上げるための教育プログラムです。



大阪市役所正面玄関

大阪大学と OOS 協定を結んだきっかけは何でしたか？

もともと大阪市教育委員会の指導部が中心となって、大阪市の教育をより充実させるために、大阪大学の様々な知見を教育委員会の取り組みに生かしたいという思いがありました。人間科学研究科の志水宏吉先生や高田一宏先生には、昔から大阪市の人権教育に深く関わっていただき、様々な助言やあるべき方向性を示していただきました。多文化共生教育について、以前は国際理解教育という名称で取り組みを実施しておりまして、その中心となっていたのが韓国・朝鮮につながる子どもたちに対する差別の解消に向けた取組でした。しかし、近年になり、在籍する子どもたちの国籍も多様となり、これまで培ってきた人権教育をどのように広い分野に活用できるのかを考えていたところ、もともと我々と同じように教育委員会に勤めていて、今は大阪大学にいらっしゃる榎井先生と私たちの取組が完全にリンクするということでお力を借りて、活動を進めています。

未来共生キッズの取り組みは今後どのように広げていく予定ですか？

未来共生キッズの取組内容は、昨年度末に冊子にまとめ、今後は市内の学校へ冊子配付をして、現場の先生方の実践に役立てようと考えています。実は、未来共生キッズの冊子は『学力の基礎としての人権教育』というシリーズの中の一つの企画あり、同和教育編、LGBT 編などのシリーズの中の多文化共生編という位置付けです。この冊子の内容は、大阪市の先生方が閲覧できる waku×2.com-bee という web サイトにも掲載をしていますが、サイト内の情報が豊富で、なかなか現場の先生方の目にも留まりづらいという欠点があります。そこで紙媒体の冊子にして、各学校へ配布し、さらに今年度からモデル配置した未来共生教育統括コーディネーターが現場の先生方の相談に乗り、ゲストティーチャーとつなぐ等、一緒に授業を創りあげていく体制を整備中です。

冊子には様々な授業案が掲載されており、大阪大学だけでなく、NPO の方々と一緒に行う内容もあります。これまでの同和教育などの取組では現場の先生自身が授業案を作って、授業を展開していました。しかし、今では教員は多忙となり、すべてを行うのがなかなか厳しい現状です。そこで先生方の負担を減らすという目的と、より多様な視点を持ってもらえるように授業と人々の繋がりをテーマにしたパッケージになっております。

未来共生教育統括コーディネーターはまだ1名しかおらず、本冊子もできたばかりですので、まずは人権教育の経験豊かな先生方がいらっしゃる学校を中心に活用して頂くこととなりますが、近年の外国にルーツのある子どもたちは、国籍も多様で、少数点在している状況で、大阪市の約6割の小中学校に外国籍の子どもたちが在籍しています。そこで、この未来共生キッズの冊子は、人権教育の経験の少ない先生方にとってもより授業の導入がしやすくなるのではと考えております。



未来共生キッズの冊子

今後は OOS 協定でどのような取り組みを期待されていますか？

現在の大阪市教育委員会としましては、学校に通う子どもたちのみならず、不就学の子どもの問題や中学校夜間学級等に通う若者たちの日本語学習の機会の保障を一つの課題と認識しております。そして、外国につながる子どもたちの教育のみならず日本社会で生きていく上での生涯学習としての学習機会を見つめ直す必要があるのではと感じております。その時に我々の課題となってくるのが人材の不足という点です。何かの取組を行う際に通訳ですとか、支援員が必要になってきますが、我々が現在有する人材バンクでは到底たりません。日本には多くの外国出身の方々がいらっしゃいますが、その方々の力はまだまだ活かしきれていないのが現状です。そこで、既に日本に住んでいる方々を巻き込んでいく新たな仕掛けを大阪大学と一緒に展開できたらと思っています。

今回のインタビューで特に印象的だったのは「外国につながる方々が日本で自分らしく生きていくにはどうすればいいのか？」という当事者に寄り添った言葉でした。大阪市教育委員会さんでは、外国につながる子どもたちの今ある具体的な問題だけでなく、その子どもたちの将来も見据えた仕掛けを考えており、それは大学で研究を行う研究者サイドの我々も大切すべき考え方だと改めて感じました。お話ありがとうございました。

◆2.2 OOS 関連イベント

日付	時間	タイトル	場所
2021年 7月5日	15:30	野田学講義「新宗教も大学と同じ?!」	オンライン
2021年 9月21日	14:35	野田学講義進路指導って、なに？ キャリアって、なに？ みなさんの「キャリア」のために	オンライン

◆2.3 OOS シンポジウム

日付	時間	実施・主催	場所
2022年 3月7日	13:30- 17:00	OOS シンポジウム	オンライン

REPORT

第4回 未来共創センター OOS シンポジウム

日時：2022年3月7日（月）
場所：オンライン（Zoom）での開催
主催：大阪大学大学院人間科学研究科
附属未来共創センター



人間科学研究科長からのご挨拶

プログラム

【開会挨拶】 臼井伸之介（大阪大学人間科学研究科長）

【第一部】 OOS による共創の取り組み

「日本酒『緒方洪庵』と、えひめ南予きずな博」人間科学研究科 教授 川端 亮 氏

【第二部】 新規 OOS 協定先の紹介

- ・大阪トヨタ自動車㈱ 経営企画部 主査 安田 幸博 氏
- ・吹田市社会福祉協議会 地域福祉課主幹 新宅 太郎 氏
- ・一般社団法人パースペクティブ 代表 松山 幸子 氏

【第三部】 未来共創ワークショップ “気候変動” と “コロナ後の社会” を考えよう！

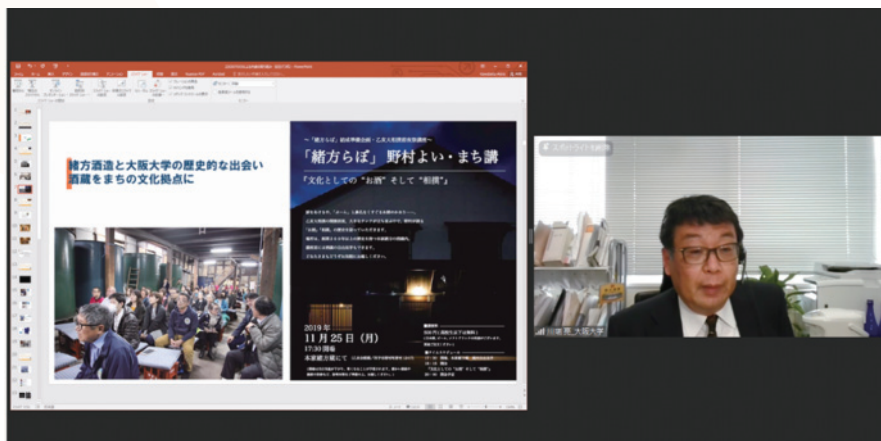
シンポジウム総括：附属未来共創センター長 山中 浩司

参加者：企業・NPO・自治体・大学教員や学生を含めて50名程度

内 容

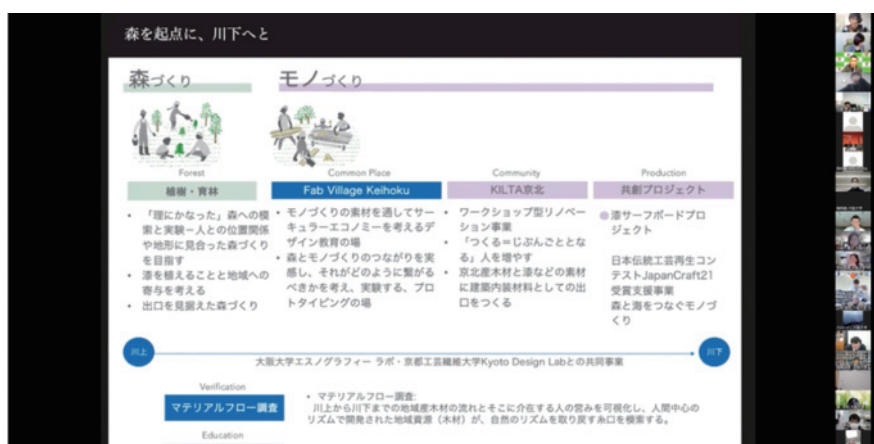
第一部では大阪大学人間科学研究川端亮教授より「緒方らぼ」における取り組みの報告がなされました。「緒方らぼ」は酒造再生を中心としたまちづくりのプロジェクトであり、大阪大学を中心に愛媛県西予市野村町の野村地域自治振興会や愛媛大学社会共創学部と共に西日本豪雨によって被災した緒方酒造の「緒方洪庵」を復活させる活動に取り組みました。本来であればよそ者である大阪大学が仲介することによって、地区内での様々な協働が生まれることになった過程を川端教授より報告を頂きました。川端教授の発表を受けて、野村町地域自治振興会様より「これまでの活動を

さらにパワーアップさせて、今後も活動続けていきたい」というコメントを頂き、そして、川端教授と共に緒方洪庵の復活に携わった佐藤功教授からは「今回のプロジェクトでは教員側も学内で新たな関わりを築くことができたが、学生たちも野村町の人々と関わることで、当事者意識を理解することができるようになった。」と今回の活動を通じて学生にも大きな学びがあったとのコメントを頂きました。



第一部の川端教授のご発表

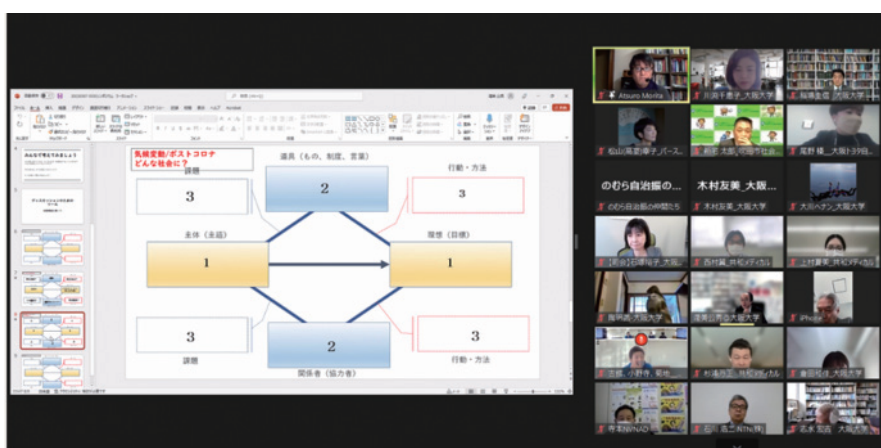
第二部では新たに協定を結ぶことになった3団体より協定に基づく取り組みが紹介されました。最初に大阪トヨタ自動車株式会社の安田幸博様より「防災」をキーワードに大阪大学人間科学研究科の稲場教授の取り組まれている独立電源通信装置「たすかんねん」が大阪トヨタ自動車株式会社の本社ビル屋上に設置されるまでの流れの報告を頂きました。次に吹田市社会福祉協議会の新宅様には大阪府北部地震をきっかけに大阪大学と様々な団体と共に吹田市災害ボランティアセンターが立ち上がった過程や、その後のコロナ禍における高齢者支援に関する活動、そして、グローバルビジレッジ津雲台における住民のつながりに関する活動の報告をして頂きました。最後に一般社団法人パースペクティブの松山様からは運営されている「工藝の森」と大阪大学との関わりについて紹介をして頂きました。「工藝の森」では森を起点に森づくりとモノづくりの両方に関わりながら、様々な人々を巻き込んでいく活動を展開しています。その中で知の共創という視点から大阪大学の Ethnography Lab がマテリアルフロー調査やデザイン人類学的教育プロジェクトなどを共同で展開しています。



第二部での協定企業様のご発表

第三部では参加者全員が「気候変動」と「コロナ後の社会」という二つのテーマでワークショップを行いました。ワークショップに先立って森田敦郎教授より「気候変動」に関する話題提供、渥美公秀教授より「ポストコロナ」に関する話題提供がなされ、学生がファシリテーターになって、6,7人の小グループに分かれてディスカッションを行いました。

「気候変動」のディスカッションでは温暖化ガス削減のために環境負荷の少ない技術や新しい技術の活用が挙げられました。また個人の努力だけでなく、様々な国や団体による協働で取り組む必要性が指摘されました。「ポストコロナ」のディスカッションではコロナによってICTの活用が促進された一方で、使える人と使えない人との間の格差も現れたために、それをいかに解消できるのかが重要であるとの意見が挙げられました。



第三部でのディスカッションの様子

最後に附属未来共創センター長の山中浩司教授が総括しました。本シンポジウムでは、「つながり」の重要性が改めて認識できたとともに、あまりにも社会が様々な形でつながっているために、何か動くと他の何かに影響を与えてしまうという難しさを言及しました。そして、「つながり」の反対として「こもる」という言葉を提示し、様々なつながりがある社会の中において、こもって自分自身を見つめ直すことの重要性を指摘しました。最後に次期センター長に就任予定の村上靖彦教授の紹介と挨拶があり、閉会となりました。

3 オープン・プロジェクト

2020 年度から、未来共創センターではオープン・プロジェクトが開始されました。学系間および他部局との協働を推進し、本研究科と社会の結節点としての社会学共創活動を展開するものです。本プロジェクトを通じて、共生社会実現に向けての実践的な研究、教育活動を展開しています。2021 年度は継続 10 件、新規 2 件、計 12 件のプロジェクトが採択されました。

	プロジェクト		プロジェクト
1	Ethnography Lab	7	グローバルビレッジ・コミュニティ・プロジェクト (GCP)
2	災害ボランティアラボ	8	マイノリティ教育ラボ
3	心理・行動フォーサイトラボ	9	老いと死の研究ラボ
4	地方における人材共創プロジェクト	10	緒方らぼ
5	子どもの安全ラボ	11	哲学の実験オープンプロジェクト
6	障害ラボ	12	MeW プロジェクト： 生理用品を通した月経の諸課題の実証研究

◆3.1 オープン・プロジェクトの活動

◎Ethnography Lab 担当教員：森田 敦郎

ウェブサイト：<http://ethnography.hus.osaka-u.ac.jp/>

プロジェクトへの学生参加の人数：30 人

社会学・社会貢献イベントの件数と参加人数：7件／参加者 300 人（オンライン参加者含む）

フィールド調査科目 3 科目を実施した。初級の授業に関しては、2021 年に 40 名弱、2022 年は 45 名が受講（2022 年は履修登録）した。履修登録者の所属学系は、行動学系を除く全ての学系に満遍なく分布しており、2022 年に関しては社会環境学、教育環境学の講座では所属 M1 の 9 割以上が履修登録している。このことから研究科になくてはならない科目として定着していることが窺える。

エスノグラフィを通した産学連携活動においては、一般社団法人パースペクティブ、京都工芸繊維大学とデザインとエスノグラフィの協働手法の研究開発を行い、その成果を授業及びオンライン配信のセミナー等で公開した。特に、この成果に基づく「デザイン人類学」の授業動画（YouTube にて限定公開）は、学外のオーディエンスに 1100 回程度試聴されている。また、これらの活動に関心を持つ企業、デザイナー、アーティストからの問い合わせも相次いでいる。こうした活動に基づいて、産学連携本部と新たな企業向けサービスの開発についての打ち合わせ等を行い、産学連携本部の新規事業に協力することになった。

また、エスノグラフィを用いた土木工学、環境科学とのコラボレーションの可能性を探るために、日本学術会議地球惑星科学委員会 地球・人間圏分科会 社会水文学小委員会に森田が委員として参加し、水文学、水資源管理、水工学関連分野におけるエスノグラフィの活用動向の紹介、新たなコラボレーションの可能性の検討を行っている。このほか、林野庁のデジタルシステム構築事業において、調査分析方法の助言等の活動も行なった。

◎災害ボランティアラボ 担当教員：渥美 公秀

プロジェクトへの学生参加の人数：70 人

社会学・社会貢献イベントの件数と参加人数：15 件／参加者 135 人

(1) 日本ノート「考える学習帳」の監修

子どもの安全ラボの岡さまのご紹介で、小学生を対象にした「考える学習帳」における下記の3点について、監修を行った。

- ・「ぼうさいをかんがえる」(1～3年生対象)
- ・じぶんのぼうさいバックをつくろう」(1～6年生対象)
- ・「避難計画をたてよう」(3～6年生対象)

(2) 新型コロナウイルス座談会(1回)

新型コロナウイルス感染症について、下記のゲストお二人をお招きし、オンラインで非公開の座談会を開催した。

日 程：10月10日(日) 13:00～15:00

場 所：オンライン(参加者：約20名)

テーマ：『「わが事」として考えるコロナ禍での生活』

内 容：コロナに関するニュースは毎日のように流れ、コロナに「慣れてしまっている」生活を送っている。しかし、突然の自身、あるいは家族のコロナの感染、濃厚接触者としての特定、学校や職場での集団感染は、私たちの日常を大きく変えてしまう。そのような事態に見舞われた際に必要な情報、対応策については、「わが事」としてざっくばらんに意見交換した。

ゲスト：山口悦子氏(大阪市立大学病院)・・・医療の立場から

吉椿雅道氏(CODE 海外災害援助市民センター)・・・市民活動の立場から

共 催：NPO 法人日本災害救援ボランティアネットワーク、渥美研究室

協 力：すいすい吹田

(3) 防災ウォーキングお楽しみ会(1回)

コロナ禍で外出の機会が減り、運動不足などから体調を崩したり、人とのつながりが希薄する中で、防災意識の低下を防ぐために開催した。

日 程：11月3日(祝) 10:00～11:30

場 所：千里南公園(参加者：約15名)

テーマ：「歩く」×「哲学」

内 容：公園内の周回コースで、グループに分かれてウォーキングを楽しみながら、「人を助けることは可能か」や「学校にはいかなくてもいけないのか」などのお題について話し合ってもらい、最後に全体で意見を共有した。お天気も良く、参加者全員が満足のいくとても有意義なプログラムになったのではないと思う。

共 催：未来共創センター

(コロナ感染の影響で、開催は1回に留まった)



（４）独居高齢者への「よりそい隊」の活動

新型コロナウイルス学習会の成果として、学生グループ「すいすい吹田」が中心になって始まったこの「よりそい隊」の活動も３年目に入り、今年度も五月が丘地区の独居高齢者を対象にした活動を継続した。

日 程：2021年４月～（月１回程度）

場 所：吹田市五月が丘地区

内 容：独居高齢者約 130 名に、阪大人科の学生が書いた通信を、五月が丘福祉委員の皆様により戸別に届けてもらった。

共 催：すいすい吹田

協 力：吹田市社会福祉協議会（五月が丘福祉委員会）

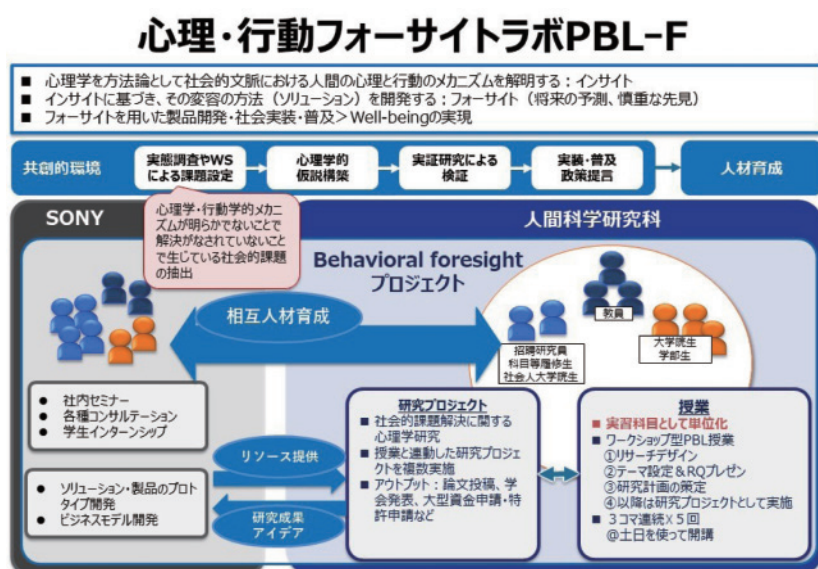


◎心理・行動フォーサイトラボ 担当教員：三浦 麻子

ウェブサイト：<https://pbl-f.hus.osaka-u.ac.jp/>

プロジェクトへの学生参加の人数：７人

社学・社会貢献イベントの件数と参加人数：１件／参加者 ９人



大阪府が実施している「10歳若返りプロジェクト」一日常生活に支障がない期間「健康寿命」を延ばし、誰もが生涯生き生きと活動することを目指した取り組みに参画した。心理・行動フォーサイトラボが主催する、大阪府・摂津市と人間科学研究科・人間科学部の学生7名によるワークショップでのアイデア、および大阪府民を対象とした健康行動調査の結果を基に実験を企画し、JR西日本の協力を得て、駅の階段に「階段を上りたくなる」仕掛けを施すことで、駅利用者の行動をエスカレータ利用から階段利用に変えることができるかどうかを検証した。実験の実施場所は、JR千里丘駅東口階段（上り用階段）で、実施期間は、2021年12月1日（水）～2022年1月31日（月）であった。階段の左右エリアを「西への旅」「東への旅」の選択肢とみなして各エリアの利用人数を人流計測センサーでカウントし、これを千里丘駅からの移動距離・消費カロリー・削減される医療費に換算して階段出口頭上のモニター画面に表示した。この「仕掛け」設置により、

階段利用者は 59% 増加し、その効果は 2 ヶ月にわたって持続していた。本取り組みにより、(1)健康に関する行動変容のためには、ターゲットとそれを取り巻く場面や状況を特定し、そこでの具体的な行動をとりあげ、それをどのように変容させるか具体的に示すこと、(2)継続した健康行動の変容・維持のためには、単に環境を整備するだけではなく、日々の努力が可視化され動機づけを維持する「仕掛け」を設置することが重要であること、の 2 つが示唆された。



◎地方における人材共創 担当教員：吉川 徹

プロジェクトへの学生参加の人数：3 人（感染防止対策のため対面開催の制限あり）

社会学・社会貢献イベントの件数と参加人数：1 件／参加者 2000 人

（2022 年 4 月末日 動画視聴総数）

このプロジェクトでは、地方県における中等教育及び県内高等教育機関の在り方を調査分析し、若年層の人口流出の実態を、教育社会学、家族社会学、地域社会学の観点から明らかにする。その知見を地域に暮らす市民に伝え、現場における実践活動と協働しつつ、近未来に向けての課題を論じる。

具体的な活動としては、令和 4 年 1 月 23 日に島根大学山陰研究センターと大阪大学人間科学研究科附属未来共創センターの共催で、公開シンポジウムを開催した。これは 2 年越しで延期が繰り返されてきた主軸イベントである。その概要は、高校教員、大学、地元自治体などの若年層の進学、就労と地域移動に関わる当事者が、それぞれの立場から実態報告を行い、ディスカッションにより相互理解を深めるというものである。島根県松江市の 500 人収容のテルサホールで対面公開の準備を行ったが、当日は新型コロナウイルスの第 6 波の急激な感染拡大に

より、急遽入場を中止とし、ウェブによる動画配信のみの設定に変更した。

登壇者は、基調講演として吉川徹（大阪大学）、事例報告として、石田龍之介（大阪大学人間科学研究科博士前期課程）、片岡佳美（島根大学法文学部教授）、石飛憲（島根県立横田高等学校主幹教諭）で、指定討論者として島根県雲南市の石飛厚志市長を招いた。

この公開シンポジウムは翌日の地元紙において報道されたほか、島根大学法文学部、未来共創センターからも広報され、動画視聴数は現在までに 2000 を超えている。島根県の教育関係者、県の政策企画監などからもメール等で反響を得ている。これらを手掛かりとして、引き続き地域と連携しつつ、現状の把握と、将来的な解決に向けての動きの支援を行っていききたい。

◎子どもの安全ラボ 担当教員：中井 宏

プロジェクトへの学生参加の人数：5人

社会学・社会貢献イベントの件数と参加人数：33件／参加者1,300人（講演の聴講者含む）

大阪大学未来基金「クラウドファンディング基金」寄付金募集実施プロジェクト（2020年5月～6月に実施）である子どもの事故予防のための啓発本作成を進めた。事故統計データや先行研究の収集を経て原稿もほぼ出揃い、2022年度前半には電子書籍としての出版、その後、紙媒体での出版を計画している。書籍中には、人間科学研究科に在籍中の大学院生が実施している研究を踏まえたコラムも3本掲載予定である。



これ以外の取り組みとしては、2021年度は以下のような活動を行った。

- ・文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会学校安全部会における情報提供（安全教育の実践例と普及への課題）
- ・公益財団法人国際交通安全学会に社会貢献プロジェクト「青少年に対する効果的な交通安全教育の普及促進活動」への参画
- ・某文具メーカーが発売する児童向け学習帳の表紙裏に掲載する事故予防・防犯・防災の記事監修（※災害ボランティアラボと協働）
- ・学校安全に関する出前授業など（高槻市立寿栄小学校、富田林市立喜志小学校、神戸市立成徳小学校）
- ・ファミリーサポートセンター会員への講習×10回
- ・子どもの事故予防に関する講習（NPO 法人生涯学習サポート兵庫、大阪市保育・幼児教育センター、茨木市学童保育課、八尾市など）

◎障害ラボ 担当教員：石塚 裕子

プロジェクトへの学生参加の人数：1人

社会学・社会貢献イベントの件数と参加人数：2件／参加者120人

本年度はこれまで構築してきた信頼関係をもとにエコレンジャーと下記の協働活動をスタートさせた。その他、研究会の開催、セミナーの共催などを行った。

（1）キャンパス調査

エコレンジャーは清掃活動を通じて、キャンパスに精通していることを活かして、キャンパスの危ないところ、心地のよいところを調べて紹介する「キャンパス調査」を開始した。2022年11月と12月に計5日間、延べ14人の協力を得て実施している。

（2）エコガーデンプロジェクト

昨年に引き続き、共生学系実験実習の一環で、人科内に整備されたコミュニティ・ガーデンの花植作業に9名のスタッフが参加し、学生との交流をはかった（2021年12月17日）。

さらにエコレンジャーの新たな職域開発とコミュニケーションが苦手なスタッフを考慮して“半分閉じて半分開いた”交流の場として「エコガーデンプロジェクト」を始動している。本プ

プロジェクトは、人科 50 周年事業にも位置づけ、1 年間を通じて社会実験的にやっている。

プロジェクト名の投票、主体的な花植作業を行い、スタッフの主体的なプロジェクトの実施を試みている。また日常の維持管理を通じて、ゆるやかな教職員との交流を図ろうとしている。



(3) その他

研究会を 1 回開催し、プロジェクトの状況を共有するとともに、大学での障害のある人の雇用の実態と課題について協議を行った。また、災害と障害をテーマにしたセミナーを共催し、情報保障、当事者の参加の促進に協力した。

◎グローバルビレッジ・コミュニティ・プロジェクト (GCP)

担当教員：稲場 圭信

プロジェクトへの学生参加の人数：200 人

社会学・社会貢献イベントの件数と参加人数：3 件／参加者 1250 人

- ・ GCP 会議：GCP のメンバー間で活動についての会議を 9 回開催した（4 月 22 日、5 月 21 日、6 月 17 日、8 月 7 日、9 月 6 日、10 月 7 日、11 月 15 日、2 月 28 日、3 月 18 日）。
- ・ GV 津雲台街づくり協議会の設立（2021 年 5 月）：会長に共和メディカルの杉浦万正氏、事務局長にパナソニックホームズの上田眞氏が就任
- ・ 高齢者向けスマホ教室開催
日 時：11 月 15 日
場 所：GV コミュニティスペース、参加者約 20 名（近隣住民の方＋寮生）
- ・ ジャワ舞踊演舞＆ワークショップ
日 時：11 月 20 日
場 所：つくもスクエアおよび玄関ホール
佐久間新先生・佐久間ウィヤンタリ先生・坂口裕美子先生を招いて、ジャワ舞踊演舞とワークショップを行った。
参加者：約 30 名（サ高住にお住まいの方＋寮生＋教職員宿舎にお住まいのご家族）

・GV 津雲台街づくり協議会発足式+GV 津雲台オープニングイベント

日 時：11 月 21 日

場 所：GV 全体、参加者：約 1200 名



◎マイノリティ教育ラボ 担当教員：榎井 緑

ウェブサイト：<https://www.minoritylab.net/>

プロジェクトへの学生参加の人数：54 人

社会学・社会貢献イベントの件数と参加人数：1 件／参加者 300 人

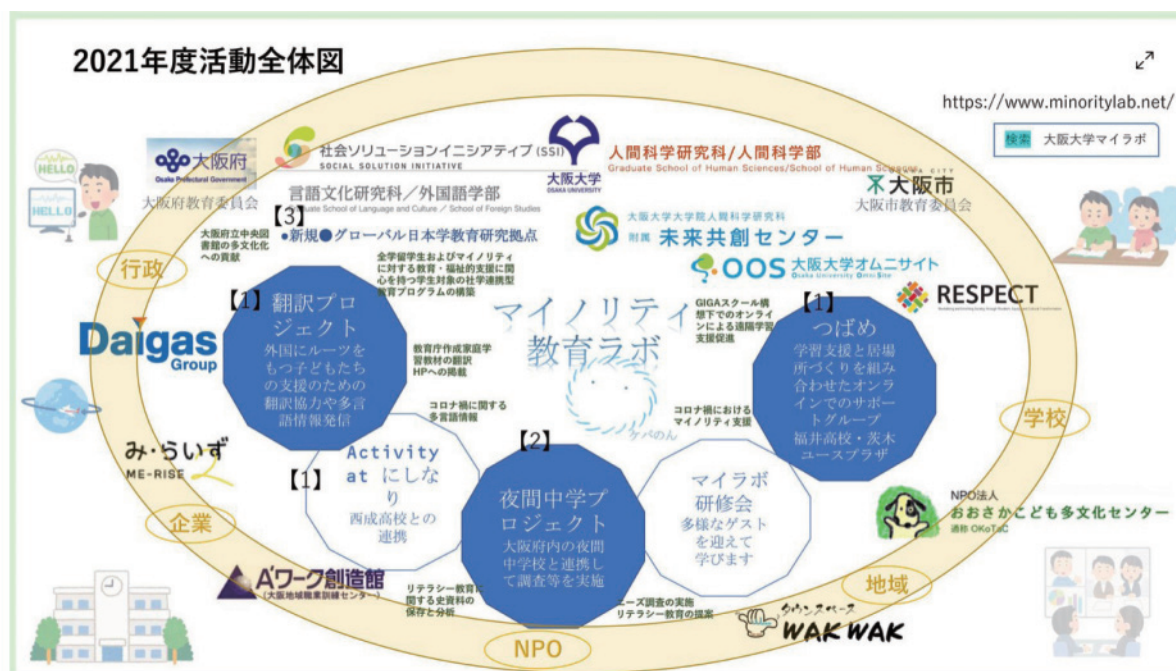
2021 年度は、2020 年度から展開しているコロナ禍におけるマイノリティ支援活動を継続した。オンラインによる中高生への学習指導のほかに、コロナ禍に関する情報や大阪府教育庁作成の家庭学習教材などを 14 か国語に翻訳し、大阪府 HP およびマイノリティ教育ラボ HP に掲載してきた翻訳プロジェクトでは、小・中学生・高校生のための数学多言語対応版動画コンテンツなどを京都教育大学と連携しながら紹介した（2022 年 4 月にはウクライナ語のページを作成した）。また、留学生などゲストティーチャーの依頼の窓口をマイノリティ教育ラボに設置し、教育委員会や学校からの依頼を受けながら対応システムの構築を図った。大阪府立図書館の多言語による絵本の読み聞かせプロジェクトに協力し、「いろんなことばでえほんをたのしもう！」の活動に参加した。

人文学研究科（日本語学専攻）、日本語日本文化教育センター、全学教育推進機構、国際共創大学院学位プログラム推進機構と連携する「日本におけるマイノリティ教育の理論と実践」を開発し、人間科学研究科が幹事部局となり 2022 年から大学院等高度副プログラムとして実施することとなった。具体的には、人間科学研究科の教員、人文学研究科の教員、大阪府・市教育委員会が連携し、全学の留学生およびマイノリティに対する教育・福祉的支援に関心のある大学院生を対象とした社会学連携型の教育プログラムであり、今後専攻した学生たちがマイノリティ教育ラボとしても活動できるようにしている。

昨年度から継続して夜間中学校プロジェクトを促進した。①夜間中学校の従来のリテラシー教育

に関する資料の保存と分析。②夜間中学校関係者（生徒、教諭、外国人児童生徒支援員、日本語指導支援員）へのインタビューによるニーズ調査の実施とその結果に基づく今後のリテラシー教育の提案のために、大阪府の夜間中学連絡協議会などへ参加した。また、守口市さつき学園（夜間中学）での総合的学習の時間にヒンドゥー文化とインドネシア文化を担当する講師として大学院生を派遣した。

日本学術会議心理学・教育学委員会排除・包摂と教育分科会・乳幼児発達・保育分科会公開シンポジウム（10月31日）に、認定NPO法人子どもの里理事長荘保共子氏の講演「福祉と教育のはざまで子どもの成長見守る」のコメンテーターとして共同代表の岡部が登壇した。



◎老いと死の研究ラボ 担当教員：権藤 恭之

ウェブサイト：<http://gerontology-osaka.jp/>

プロジェクトへの学生参加の人数：40人

社会学・社会貢献イベントの件数と参加人数：1件／参加者 60人

2021年度には、1度の国際研究会を共催した。2021年6月29日に、International Centenarian Consortium (ICC2021) がオンラインで開催された。この会議には、百寿者について研究する国内外の研究者が参加し、意見交換を行った。この会には約60名の参加者を得た。また、2度の勉強会を実施した。第1回目は2021年11月17日で、同志社女子大学の日下菜穂子氏を講師として招へいし、「地域で実装可能な well-being を共創する社会システムの設計」という題目で、大学と地域高齢者とで共同して行っている様々な取り組みについて講義をしていただいた。第2回目は2022年2月2日で、大阪大学大学院歯学系研究科の池邊一典氏に、「知っておきたい「オーラルフレイル」のABC」という題目で、いまだあまり一般的に知られていない「オーラルフレイル」という概念について講義していただいた。これらの勉強会はZOOMを介して行われた。大学や研究機関の関係者のみならず、専門職から一般の方まで、幅広く参加者を募集し、第1回目で70名程度、第2回目で45名程度の参加者を得た。さらに3月5日には、佐藤眞一教授

最終講義「生と死と、命と：心理老年学と臨床死生学」をハイブリッド形式で実施した。学内外に幅広く告知し、オンライン 160 名程度、現地 40 名程度 計 200 名程度の参加者を得た。

他にも、3 つの学外団体と連携して活動を行った。第一に、特定非営利活動法人健康・生きがい就労ラボと共同して、地域高齢者を対象としたスマホ教室を定期的の実施し、学生・大学院生がスタッフ側として参加した。第二に、株式会社ライフケア・ビジョンと連携し、サービス付き高齢者施設での、より良いサービスに向けた研究を継続している。第三に、12 月には伊丹市生涯学習センター（ラストホール）とともに、「老いを学生とともに学ぶ」というイベントを企画し、計 25 名程度の参加者を得た。このイベントでは、人間科学研究科国際交流室の安元佐織氏を講師として招へいし、老いに対するイメージと実際について、学生と地域高齢者とで議論し、相互に学びを得た。

◎緒方ラボ 担当教員：川端 亮

ウェブサイト：<https://nomuraneo.wixsite.com/toppage>

プロジェクトへの学生参加の人数：10 人

社会学・社会貢献イベントの件数と参加人数：6 件／参加者 500 人

2018 年西日本豪雨の被災地である愛媛県西予市野村町において、地酒の復活を通じてさまざまな共創活動を行っている。

大阪大学人間科学研究科オープンプロジェクト

緒方らぼ

復興支援！
銘酒「緒方洪庵」新生復活
野村のまちづくりを応援したい

水害で失われた銘酒「緒方洪庵」販売中

愛媛県で続いてきた本家緒方の歴史と伝統を
適塾を源流とする大阪大学がつなぎ、
愛媛県西予市野村町の復興まちづくりを応援します！！

**緒方らぼ は、
愛媛県主催 えひめ南予きずな博で
がいなんよ大学 IN のむらを開校します。**



大阪大学人間科学研究科
担当：川端 亮
kawabata@hus.osaka-u.ac.jp

- 2021 年 4 月 クラウドファンディング「復興支援！銘酒「緒方洪庵」を復活させ、野村のまちづくりを応援したい」を実施、支援金額 3,123,000 円
- 2021 年 4 月 銘酒「緒方洪庵」復活のプレスリリース（野村町緒方らぼと大阪大学の 2 ヶ所）
- 2021 年 6 月 「緒方洪庵」完売
- 2021 年 7 月 えひめ南予きずな博のプロローグ企画として「がいなんよ大学 in のむら」を開催
第 1 講「関係人口と地域づくり」田中輝美島根県立大学准教授（緒方らぼ）

- 2021年8月 **がいなんよ大学 in のむら 第2講**
「のむらっ子にYouTubeの授業をしてみた」はなおでんがん（野村小学校）
- 2021年9月 **がいなんよ大学 in のむら 第3講**
「全国高校生まちづくりサミット in のむら」Nージオチャレ（オンライン）
- 2021年11月 **がいなんよ大学 in のむら 第4講**
「防災に関する学び／防災を通じた学び」矢守克也京都大学教授（緒方らぼ）
- 2021年11月 大阪大学賞大学運営部門受賞
「新生「緒方洪庵」酒の醸造販売による西予市野村地域の復興まちづくり」
- 2021年12月 新生「緒方洪庵」第二弾の醸造開始
- 2022年2月 新生「緒方洪庵」第二弾の上槽
- 2022年3月 **がいなんよ大学 in のむら 第5講**
「のむライクな集い～疫病退散 酒と相撲と落語～」を実施し、創作落語「緒方洪庵」と新生「緒方洪庵」第二弾のお披露目を行った。
- 2022年3月 卒業式に向けて本部前生協で新生「緒方洪庵」を販売

◎哲学の実験オープンラボ 担当教員：野尻 英一

ウェブサイト：<https://exphopenlabo.hus.osaka-u.ac.jp>

<https://twitter.com/expphilopenlab>

プロジェクトへの学生参加の人数：91人

社会学・社会貢献イベントの件数と参加人数：6件／参加者100人

国際シンポジウム件数・参加人数：1件／60人

2021年度は、「哲学の実験オープンラボ」の開設・活動開始にあたり、ネットを活用したプラットフォームおよび人的コネクションの形成に注力し、同時にラボ公式イベントとして講演会、シンポジウム、ワークショップなどを開催した。社会学連携では、インターンシップや社会学貢献イベントにおける企業やNPOとの連携を実現した。また学生主体のラボ公認プロジェクトも公募を開始し、3件の起ち上げがあった。さらに高校生・大学生を対象としたネットラジオ放送企画を起ち上げ、社会学へのアウトリーチ活動を積極的に展開すべく、年度内に準備までを行った。

1. プラットフォームおよび人的ネットワークの形成

（1）ラボ公式ホームページの作成、公開開始、（2）ラボ公式ツイッターの作成、発信開始、（3）5研究室の参加によるSlackを活用した共同プラットフォームの作成と利用開始、を行った。（3）については、すでに90名を超える学生の参加があり、順調である。

2. ラボ公式イベントの展開による社会学連携成果

ラボ公式イベントとして年度末までに計10件の講演会、シンポジウム、国際会議を開催した。企業との連携によるインターンシップを3回、企業、大阪大学共創機構との連携による社会学連携フォーラムを1回実施し、学生、企業いずれからも好評であった。

3. 学生主体のラボ公認プロジェクト立ち上げ

年度内に3件の学生による公認プロジェクトの起ち上げがあり、活発に活動している。

4. さらなるアウトリーチ活動

公認プロジェクトの1件は、ネットラジオ放送プロジェクトであり、高校生をリスナーとして

イメージしたアウトリーチ活動として企画。本放送を 2022 年 6 月に開始予定。未来共創センター予算では活動資金が不足のため、未来基金クラウドファンディングに応募する予定。



◎MeW プロジェクト：生理用品を通した月経の諸課題の実証研究

担当教員：杉田 映理

ウェブサイト：<https://mewproject-osaka-u.jp/>

プロジェクトへの学生参加の人数：99 人

社会学・社会貢献イベントの件数と参加人数：3 件／参加者 17 人

生理用品の無償提供用のディスペンサーの開発・設置の実証実験を通じて、日本における月経の諸課題について研究している。

- (1) 生理用品の無償提供用のディスペンサーの開発
- (2) 人間科学部女子トイレ・多目的トイレへの設置
 - ・2021 年 9 月～女子トイレ共用スペース、個室、多目的トイレ 計 27 か所設置（実証実験）
 - ・2021 年 3 月～人間科学棟の全女子トイレ個室、多目的トイレに設置 合計 53 か所
- (3) 使用状況のモニタリング
 - ・女子学生 4 名により、ほぼ週 1 回、各ディスペンサーの使用状況のモニタリングと生理用品の補充を実施
- (4) QR コード利用のアンケート調査、インタビュー調査
 - ・2021 年 9 月以降、ディスペンサーに QR コードをつけて、アンケートを実施。アンケート結果は、全学展開等の基礎資料として利用。
- (5) 大阪大学の全キャンパスにおいて、本ディスペンサーを利用した生理用品の無償提供を展開
2022 年 2 月 28 日～ 吹田、箕面、豊中キャンパス 31 か所に設置。その後順次、各学部設置。
- (6) 月経について学生を中心とした勉強会、フォーカス・グループ・ディスカッション
 - 第 1 回 7 月 30 日「パッドマン」一部鑑賞・ディスカッション
 - 第 2 回 10 月 22 日「生理用品について考える」
 - 第 3 回 11 月 19 日「コロナ禍と月経 ～Periods do not stop for pandemics～」
 - 第 4 回 2022 年 1 月 7 日 「月経教育 / 包括的性教育」

(7) HP 等を通じた情報発信

HP <http://mewproject-osaka-u.jp> インスタグラムおよびツイッター @mewproject_ou

【マスコミによる紹介実績】

- ・毎日新聞（2021.10.4）「ひと：女性の気持ちを軽く 大阪大准教授・杉田映理さん」
- ・日本トイレ研究所『トイレマガジン』（2021.11.25.）「月経（生理）は災害時も止まらない！ー避難所や学校のトイレ内で生理用品が提供される仕組みをー」
- ・ネオテキジューク（2021.12.26）「阪大文科のトイレに無償の生理用品が現れた理由とは…？」
- ・日本テレビ 日テレ WEB NEWS（2022.3.8～）「国際女性デー コンビニも大学も…広がる『生理』への支援」
- ・日本放送協会（NHK）NHK ニュースおはよう日本（2022.3.11）「阪大がトイレで生理用品無償提供」
- ・日本放送協会（NHK）NHK NEWS WEB（2022.3.11）「阪大がトイレで生理用品無償提供」
- ・日本経済新聞社（2022.4.25）「生理用品や鎮痛剤、負担額は？」
- ・日本経済新聞社（Web 版）（2022.4.30ー）「生理用品って高いの？ 月 400～3000 円と幅、製品も多様」



4 研究事業

◆4.1 研究会の運営

2019年度から下記の2つの研究会をセンター主催で運営しています。研究会の活動を通じて、人科内での分野を超えた学際研究を推進し、共創センターのジャーナル『未来共創』の出版につなげることを目的としています。2021年度は「教育と格差」をテーマとした研究会を実施しました。



【A. 共創知研究会（セミナー形式）】

「共創」「共創知」に関わる研究会です。2021年度は共創知研究会としてオープンプロジェクトの報告会を開催しました。

REPORT

人間科学研究科共創知研究会 オープン・プロジェクト報告会レポート

日 時：2021年6月28日（月） 16:50～18:45

会 場：E303 教室 + Zoom

参加者：計43人



未来共創センターのオープン・プロジェクト

・社会との多様な結び目をつくり、あたらしい場を創っていく

未来共創センターでは人間科学研究科の学系間および他部局との協働を推進し、本研究科と社会の結節点としての社会学共創活動を展開することにより、共生社会実現に向けての実践的な教育活動を図るためにオープン・プロジェクトを設置しています。現在（2021年6月28日時点）は11のプロジェクトが人間科学研究科内に社会との多様な結び目を、そしてあたらしい場を創るべく活動しています。

未来共創センターでは人間科学研究科の共創知研究会としてオープン・プロジェクトの報告会を開催しました。学内外から43名の方にご参加いただき、人間科学研究科の多彩なプロジェクトを紹介する場となりました。阪大のみならず他大学の学生の参加者もあり、質疑応答は活発なものとなりました。

さらに開かれた人間科学へ

・共創を実現するために

2019 年度から始まり昨年度から本格的に活動しているオープン・プロジェクトですが、コロナ禍のあおりを受けて予定通りの進行とは行かないことも多くありました。しかしいずれのオープン・プロジェクトも国内外の企業、自治体、NPO、小中高校そして他大学と連携しながら研究に取り組み、その成果を広く社会に発信しています。

参加された栗本教授はいずれのオープン・プロジェクトも人科の 3 本柱である学際性、実践性、国際性が表れていると評し、そしてプロジェクトに多くの学生が参加し、教育プログラムとして根付いていくことへの期待を述べました。

これらのオープン・プロジェクトの成果は「フィールド調査法」をはじめとする複数の科目に反映されています。また学生がオープン・プロジェクトに参加し、所定の基準を満たした場合は「人間科学学際実習」「総合人間科学実習」「総合人間科学特別実習」の単位に認定されます。学生の皆さんのオープン・プロジェクトへの積極的な参加をお待ちしています。

報告を行った 11 のオープン・プロジェクト（詳しくは P.29～P.40 参照）

- Ethnography Lab
- 災害ボランティアラボ
- 心理・行動フォーサイトラボ PBL-F
- 子どもの安全ラボ
- 障害ラボ
- グローバルビレッジ・コミュニティ・プロジェクト (GCP)
- マイノリティ教育ラボ
- 老いと死の研究ラボ
- 地方における人材共創プロジェクト
- 緒方らぼ
- 哲学の実験オープン・プロジェクト



【B. テーマ研究会（勉強会形式）】

毎年テーマを決めて、そのテーマに関心のある教員や学生を募集し、約 2 か月に 1 度のペースで研究会を実施しています。2021 年度は「教育と格差」がテーマでした。国際協力学、国際法学、教育社会学、教育制度学、生涯教育学、社会言語学、公衆衛生学等の観点から、コロナ禍でますます深刻となる教育と格差の課題について論じました。本研究会の成果はメンバーのうち 4 名がジャーナル『未来共創』の特集「教育と格差」への共創的アプローチ」に寄稿する形で公表しています。



◆4.2 ジャーナル『未来共創』の発刊

第6号まで刊行されてきたジャーナル『未来共生学』を引き継いで、名称を新たにジャーナル『未来共創』として2021年度は第9号を発刊しました。2021年度の第9号では査読論文4本、特集論文4本、研究ノート2本、報告2本、書評5本、そして1本のエッセイが収録されています。また本号では臼井伸之介研究科長から巻頭の言葉として「人間科学の創立50周年にあたって」をご寄稿いただきました。

◎目次

発刊にあたって	澤村 信英	001
人間科学の創立50周年にあたって	臼井伸之介	003

《論文》

共生、あるいはすれ違うこと： ドゥルーズの『変..ライブニッツとバロック』を手がかりにした考察	平田 公威	005
病いと揺らぎ—— 北條民雄「いのちの初夜」におけるに名乗りと名付けに関する考察	井上 瞳	033
マイノリティ多数在籍校におけるニューカマー生徒支援の課題	伊藤 莉央	067
コロナ禍における高齢者の社会活動の実態 —京都市にある通所型サービスの利用者のインタビューから—	寺村 晃	097

《特集 教育と格差》

特集にあたって「教育と格差」への共創的アプローチ	織田 和明・木村 友美	122
Covid-19の教育に対する権利への影響	徳永恵美香	127
ケニアの中等教育における低学費私立校の公共性—教育格差に果たす役割—	小川 未空	143
夜間中学の「あってはならない」から「なくてはならない」へ ～法制度化への経緯と今後の課題～	榎井 縁	173
パンデミックは学校のデジタル教育に何をもたらすか	園山 大祐	199

《研究ノート》

ブラジルの大学入試におけるクォータ制度の検討	山脇 佳	225
『サバルタンは語ることができるか』を共に読み共に書く —共生学の3つのアスペクトを中心に—	宮前 良平、ほか	243

《報告》

コミュニティ・ラーニング2021 報告 一つながる・つづくコミュニティ・ラーニング—	石塚 裕子、ほか	277
食で地域と結ぶ高齢者施設—青森市と奄美市の事例から	木村 友美、ほか	297

《書評》

『アンダークラス化する若者たち』	水野 聖良	310
『ホワイト・フラジリティ 私たちはなぜレイシズムに向き合えないのか』	大川ヘナン	314
『〈教師の人生〉と向き合うジェンダー教育実践』	山口 真美	318
『児童養護施設の生活環境のダイナミクス —家族で暮らせない子どもの育ちと職員の実践—』	三品 拓人	322
『Internal Self-Determination in International Law History, Theory, and Practice』	島本 奈央	326

《エッセイ》

共創的な研究データの収集 —新型コロナウイルス感染症拡大がもたらした調査手法—	澤村 信英	330
編集後記	織田 和明	335



5 教育事業

◆5.1 未来共創センター担当授業

未来共創センターでは、下記の授業を担当しています。

(1) フィールド科目

【学部】未来共創フィールド実習Ⅰ 春～夏学期

【学部】未来共創フィールド実習Ⅱ 秋～冬学期

【博士前期課程】未来共創フィールドスタディⅠ 春～夏学期

【博士前期課程】未来共創フィールドスタディⅡ 秋～冬学期

2021年度は、「未来共創フィールド実習Ⅰ」の一環として、滋賀県草津市常盤学区における防災計画に関わるフィールドワークを実施しました。（参加した学生の声を、p.48に掲載しています。）

(2) 実践型学修活動

【学部】人間科学学際実習Ⅰ 春～夏学期

【学部】人間科学学際実習Ⅱ 秋～冬学期

【博士前期課程】総合人間科学実習Ⅰ 春～夏学期

【博士前期課程】総合人間科学実習Ⅱ 秋～冬学期

【博士後期課程】総合人間科学特別実習Ⅰ 春～夏学期

【博士後期課程】総合人間科学特別実習Ⅱ 秋～冬学期

(3) 人間科学学際研究特講

人間科学研究科の学際研究特講において、6時間分の授業を担当しています。2021年度は、学系をこえたグループにおいて、「大阪万博でどのような共創プログラムができるか？」というお題をもとにディスカッションし、グループでのアイデアがまとめられました。



◆5.2 高校への出前授業

6月17日、兵庫県立小野高校にて、中井宏先生による出張授業が実施されました。



◆5.3 シリーズ人間科学の発刊

人間科学研究科附属未来共創センターが中心となり、人間科学にまつわるテーマを多分野の教員で共に執筆した書籍が「シリーズ人間科学」である。2017年3月に第1巻『食べる』を、2018年には第2巻『助ける』、第3巻『感じる』を、大阪大学出版会から刊行した。「シリーズ人間科学」は人間科学部設立当時からある「人間科学とは何ですか？」という疑問への、現時点における私たちからの回答の一つである。2021年度は、第7巻『争う』を刊行した。内容は下記のとおりである。



シリーズ人間科学 7 『争う』

栗本英世・モハーチゲルゲイ・山田一憲 編

小野田正利・綿村英一郎・山本晃輔・木村友美・宮前良平・野坂祐子・白川千尋 著

◎内容紹介

争いは、進歩や発展の原動力か？回避・解決すべき課題か？――

人間とは争う動物である。もちろん、人間以外のすべての生き物も、自らが生き残るために、そして子孫を残すために、同種内で、および他の種の生き物と日々争っている。それはふつう「生存競争」と呼ばれる。しかし、人間にとっての争いは、やはり特別な意味合いを有している。人口が爆発的に増加し、南極を除く地球の陸地のほぼ全体に生息域を広げ、そして高度に発達した国家と社会を形成した結果、人間は、国家と社会の枠組みの中で、および広く地球環境の中で、多種多様な争いを経験している。それは、食と性をめぐるたんなる「生存競争」という次元にとどまらない、複雑な様相を呈している。現代世界は、争いに満ちているといっても過言ではない。争いは、進歩や発展の原動力であると同時に、回避あるいは解決すべき課題でもある。

本書には、教育学、心理学、文化人類学、動物行動学、共生学等、人間科学のさまざまな専門分野から争いというテーマにアプローチした成果が収められている。第1部では、学校、野猿公苑周辺、そして裁判といった様々な制度や空間における争いが考察されている。第2部では、日系ブラジル人やインドネシア、ベトナムを対象として、研究者が調査研究の対象としている人々における「争い」をいかに発見するのか、そしてそのことが、対象の人々のより深い理解にいかにつながるのかを知ることができる。第3部では、災害復興、家族・恋人間の暴力、オセアニアの伝統文化を事例に、私たちが争いからいったい何を学ぶことができるのか、考えを巡らせる。

「争う動物」である人間は、他の存在との共存や共生をいかに実現することができるのか。本書はこの根源的な問いに対する人間科学からの挑戦である。

◎目次

はじめに

第1部 争いの場

第1章 時として泥沼化する保護者対応トラブル ―教師と保護者の争い

第2章 現場を共有することで生じるサルと人間の軋轢

第3章 公判で争う一法の想定を科学的視座から考える

第2部 争いの発見

第4章 日本とブラジルを往還する家族の生活とコンフリクト

第5章 主食の変化にみる「争い」ーインドネシア・パプア州における糖尿病の事例から

第6章 感染症という闘いと共生

第3部 争いからの学び

第7章 争いとしての災害

第8章 闘争後の闘争ートラウマティックな関係性の再演と回復

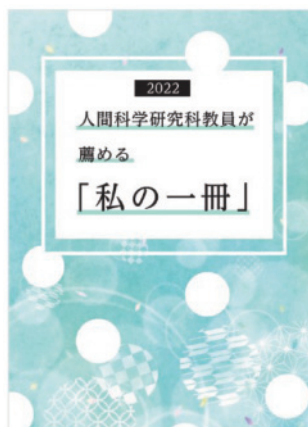
第9章 伝統文化をめぐる争い

～シリーズ人間科学これまでの出版～

- ・2017年3月第1巻『食べる』八十島安伸，中道正之 編著
- ・2018年3月第2巻『助ける』渥美 公秀，稲場 圭信 編
- ・2019年3月第3巻『感じる』入戸野 宏，綿村 英一郎 編
- ・2020年3月第4巻『学ぶ・教える』中澤 渉，野村 晴夫 編
- ・2020年3月第5巻『病む』山中 浩司，石蔵 文信 編
- ・2021年3月第6巻『越える・超える』岡部美香 編著



◆5.4 『私の一冊』の発行



人間科学研究科の教員が、学生に読んでもらいたい本を一冊ずつ紹介する『私の1冊』を作成し、学生に配布した。私の一冊は、必修科目「人間科学概論」で使用され、学生たちは掲載された書籍を選んでレポートにまとめて授業で発表した。本を通じて学生と教員がつながるきっかけとなった。

6 その他の活動

日付	時間	タイトル	主催者／共催者	担当教員	場所
2021年 5月23日	14:00～ 16:00	生き方死に方を考える 社会フォーラム 「石蔵文信と考えるコ ロナ禍での死生観」	人間科学研究科附属 未来共創センター	石蔵文信	Zoom
2021年 5月28日	13:00～ 15:00	カンボジアを聴こう in 釜ヶ崎	人間科学研究科附属 未来共創センター 未来共生プログラム	榎井 縁	NPO 法人 ココルーム +Zoom
2021年 8月29日	14:00～ 16:00	生き方死に方を考える 社会フォーラム 「生き方死に方で考える コロナの時代」	人間科学研究科附属 未来共創センター	石蔵文信	Zoom
2021年 10月18日	17:30～ 20:30	映画上映会 「福島は語る」	人間科学研究科附属 未来共創センター 未来共生プログラム	石塚裕子、 渥美公秀	ユメヌ ホール
2021年 10月23日	14:00～ 16:30	災害と福祉のまちづく り連続セミナー 第3回「原子力災害 とマイノリティ」	日本福祉のまちづくり 学会 災害研究・支援委員会 人間科学研究科附属 未来共創センター 未来共生プログラム	石塚裕子	Zoom
2021年 10月29日	17:30～ 19:00	ふくしまの復興の「今」 を知る学習会	人間科学研究科附属 未来共創センター 社会ソリューション イニシアティブ	石塚裕子、 渥美公秀	最先端医療 イノベーション 棟3階 +Zoom
2021年 11月3日～ 5日		ふくしまスタディ ツアー	人間科学研究科附属 未来共創センター 社会ソリューション イニシアティブ	石塚裕子、 渥美公秀、 今井貴代子、 山崎吾郎	福島県浜通り
2021年 11月6日	14:00～ 16:00	生き方死に方を考える 社会フォーラム 「残すべきか、残さざ るべきかー生前遺品整 理を考える」	人間科学研究科附属 未来共創センター	石蔵文信、 山中浩司	Zoom
2021年 11月11日	18:00～ 19:30	2021 コミュニティ・ ラーニング報告会	人間科学研究科附属 未来共創センター 未来共生プログラム	渥美公秀、 石塚裕子	インターナシ ョナルカフェ +ZOOM
2021年 11月29日	17:30～ 19:30	ふくしまスタディ ツアー報告会	人間科学研究科附属 未来共創センター 社会ソリューション イニシアティブ	石塚裕子、 渥美公秀、 今井貴代子、 山崎吾郎	Zoom+ユメヌ ホール、福島県 湯本温泉古滝屋
2021年 12月19日	14:00～ 16:30	生き方死に方を考える 社会フォーラム 「みとりについて考える」	人間科学研究科	石蔵文信、 山中浩司	Zoom
2022年 1月21日	17:00～ 18:00	映画上映会 『平等への行進』	人間科学研究科附属 未来共創センター 未来共生プログラム	園山大祐	M41
2022年 3月12日	14:00～ 17:00	生き方死に方を考える 社会フォーラム「生き やすさについて考える」	統計数理研究所 医療健康データ科学 研究センター	石蔵文信、 山中浩司	Zoom

Ⅲ 未来共創センターの活動に関わった皆さんの声

未来共創センターの活動に参加して

一つ目が、マイノリティ教育ラボの活動の一つである、オンライン学習支援・居場所づくり「つばめ」の運営です。ユースプラザ WEST「いばらき LOBBY」と協力して、月に2回中高生と大学生が話す場を設けました。人間科学部1年の学生3名とともに、生徒の宿題を見たり学校であったことを聞いたりする中で、だんだんと生徒自身の進路についての考えや家族との関係などについても話してくれるようになり関係を深めました。コロナ禍の自粛要請の際に始まった活動ですが、楽しみに来所してくれる生徒の様子を見て継続を決めました。

二つ目が、村上靖彦先生が出版された『子どもたちが作る町ー大阪・西成の子育て支援』（世界思想社）について語り合った、ブックトークです。私のフィールドが西成にあるご縁で、自身の研究テーマである「居場所づくり」という視点から本のコメントを発表しました。他の参加者の皆さんからのコメントはどれも新鮮で面白く、これこそが学際的な語り合いのスタートなのではと感じました。

院生になり益々研究室外の人と語る機会の減少を痛感しており、このような様々な領域の人とフラットに語り合ったり活動を共にできたりする場が貴重であると感じています。



中西 美裕

大阪大学人間科学部 4 年
（現：大阪大学大学院
人間科学研究科
博士前期課程 1 年）

未来共創フィールド実習Ⅰを受講して

私は、「未来共創フィールド実習Ⅰ」という実習で、滋賀県草津市常盤学区の地区防災計画策定委員会に参加させていただきました。

率直に感じたのは、防災の難しさです。防災計画に参加する住民には、防災意識の高い方が多く、委員会では議論も活発でした。しかし、その後防災計画を実行する段階で（そこまで防災意識の高くない方も含めて）より多くの住民を巻き込むことができるのか？という視点で見ると（私が参加した時点では）不安な点も多くありました。

それまでの自分には「地域住民」というものをどこかひとくくりにして考えてしまっているところがありました。実際には、（当然といえばそれまでですが）住民の意見は人それぞれです。地域住民が主体となって防災計画を作れば、地域の実情に合った防災計画ができる、というような単純な話ではないのだと、この実習を通じて強く感じました。これは、私が文献上で地区防災計画のことを学ぶだけでは決して実感できなかったことだと思います。文献を読んで見聞を広げ、思考を深めることと、実際に現場に足を運び、現場の方々の声を聞くこと。この両方をもってはじめて何か見えてくるものがあるということを、肌で感じることでできる時間でした。

この実習では、委員会参加だけでなく、常盤学区のまちあるきもしました。夏の日差しが照りつける中、石塚先生と汗を流して自転車を漕いだのも良い思い出です。広い空、のどかな田園風景、立派なお寺や神社。この日撮った写真はお気に入りのものばかりです。普段行くことのないような土地に足を運び、普通に過ごしていると訪れる機会のないであろう土地に足を運び、なかなか関わることのないであろう方々と出会う。結局は、この点がフィールドワークの一番の魅力だと思います！



山田 悠希

大阪大学人間科学部 3 年
（現：大阪大学
人間科学部 4 年）

野田村の OOS 協定について

「10 年後の野田村を他の村では真似できないユニークな村にする」という大目標を掲げスタートしている野田村の OOS 協定交流事業。

岩手県沿岸北部に位置する野田村は、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災大津波により被災しました。

その後、復興支援を目的として村内に「大阪大学野田村サテライトオフィス」が開設されました。毎月 11 日のサテライトセミナーは平成 30 年 2 月 11 日の最終回まで、5 年間で 60 回開催いただき、被災者との交流を通じて心の復興の大きな力にもなりました。

そして同日、大阪大学大学院人間科学研究科と本村の相互交流の継続、さらなる発展を目指し、OOS 協定を締結しました。

これまで、野田学講義（人間科学研究科の先生などを講師にしたセミナー&交流）、野田学実習（道の可能性を探る＋アンケート調査のやり方）、コミュニティ・ラーニング（大阪大学大学院生による本村でのフィールドワーク）などを核にして交流事業を展開してきました。

新型コロナウイルスの感染拡大からオンラインがメインとなり、リアル交流ができなくなった時期もありましたが、最近ではリアルとオンラインのハイブリッド方式を含め、コロナを踏まえた交流も見えつつあります。

これまでと比べて一番の変化は、村内に唯一立地する高校「久慈工業高等学校」の講義を野田学として実施することです。大阪大学の先生方と村民の交流が長く続いているので「いつもどうも」と気軽にあいさつを交わしていますが、久慈工業高校に在学しながら大阪大学の講義を受けることができる、改めて考えると、これって凄いことだと思います。

将来的には学校の魅力発信にとどまらず、本村以外の OOS 協定先との連携や採用にもつながることを期待しています。



小野寺 修一

野田村
未来づくり推進課
総括主査



発行
大阪大学大学院人間科学研究科
附属未来共創センター
〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-2
2022 年 7 月 31 日

編集・校正協力
特任研究員 織田 和明
特任事務職員 川淵 千恵子

制作・印刷
株式会社一心社



大阪大学大学院人間科学研究科

附属 未来共創センター